

# 11-12世紀のチュニス 都市共和国か君主政都市か

余部 福三

## Tunis as autonomous city during the eleventh-to-twelfth centuries

Fukuzo Amabe

After the disintegration of the Zīrid state as the result of their defeat at the battle of Ḥaydarān in 1052 at the hand of Egyptian Arab nomads composed of the Hilālī tribes, the cities of Tunisia regained their independence willy-nilly. Most of their independence was short-lived, but Tunis continued to be an autonomous city under Ḥammādid or Zīrid suzerainty until it surrendered itself to the Muwahḥid caliph, 'Abd al-Mu'min, in 1159, apart from a comparatively long interlude of Ḥammādid rule (1128-48).

During its days of independence (autonomy in a strict sense) Tunis is normally regarded as a little monarchy under Khurāsānid lords, following the habitual Muslim view, which recognized only the caliphate or the monarchy under caliphal suzerainty, disregarding the possible home-rule of cities under their notables or populace (patrician cities and plebeian cities, modified Weberian models). This article is an attempt to demonstrate that the first Khurāsānid ruler, 'Abd al-Ḥaqq, was merely head of the government of the citizens (virtually their notables) as nominal Ḥammādid (or Zīrid) governor, then his sons, 'Abd al-'Azīz and Ismā'īl, gradually built up their power-basis, claiming their privileged position as distinct from other notables despite their apparent observance of their father's convention. Finally, 'Abd al-'Azīz's son, Aḥmad, after assassinating his uncle, Ismā'īl, succeeded in consolidating his nearly monarchical power, probably in alliance with some friendly notables, and founding a royal castle (*qaṣr*) within the intra-mural city, in which he

established his large palace and an existing mosque.

So far, popular participation in Tunisian civic affairs was hardly observable, except their defense of Tunis against Zīrid and Ḥammādid assaults. However, under Ḥammādid occupation, the plebeians of Tunis were trained as footmen and received the reviews of the governors outside the gate of the sea. After the expulsion of Ḥammādid governor and garrison as the result of a popular rising, the plebeians as a whole supported a Khurāsānid restoration to cope with the notables who wanted their genuine patrician domination under the leadership of the *qādī* in alliance with not the populace, but an Arab and other raiding party under the command of Muḥriz, who had established their headquarter at Carthage. An inter-popular conflict also occurred between the inhabitants of the two suburbs. Finally, the *qādī* and Muḥriz were expelled from Tunis by a popular power and a Khurāsānid leader was welcomed back to Tunis. The Khurāsānid leader, ‘Abdullāh, was probably heavily dependent upon popular support (tyranny), suppressing patrician resistance led by a new *qādī*, but attempted to conciliate the notables as much as possible by preserving an apparent patrician form of domination. However, it seems that the notables finally gained the upper hand when the plebeians drew back when they saw a tremendous Muwaḥḥid army and navy under the command of Caliph ‘Abd al-Mu‘min in 1159, surrendering the city and accepting the confiscation of a half of their properties.

はじめに

**a. 独立都市としての初期中東・地中海都市と帝国体制崩壊後の自治回復**

アッシリアによる統一以来、新バビロニア王国、アケメネス朝ペルシア帝国、アレクサンドロス大王国、ローマ帝国とパルティア王国、アラブ＝イスラーム帝国（ウマイヤ朝、アッバース朝、ファーティマ朝）と、非常に長く、大規模家産制国家（いわゆる「帝国」）の比較的集権的な支配下（集権的といっても、実際には地方総督や地方官僚の主体的判断が優先される場合が多い）におかれてきた中東・地中海地域の都市群は、10世紀末から大規模国家の崩壊に伴い、自立傾向を強めていった<sup>1)</sup>。本来、原初期の国家とは、農民が防衛などの政治的目的（中世以後の都市は経済的目的が優越）のために集住した都市のことであり、城壁内の市街地と城壁外に発展した新市街、そして食糧を生産・供給する周辺の農業地域とからなり、大規模・中規模国家とはこのような独立諸都市をできるだけ多く、一つの権力の支

配下においたものをいう。その権力は、非常に有力になったある都市の支配者か、生産性が低く、都市を築いていない氏族社会の遊牧民・山岳農牧民を結集し得たカリスマ的な指導者によって構築される。したがって、大規模国家が崩壊したとき、一時的に都市が独立を回復することは自然な現象といえる<sup>2)</sup>。

中東諸都市では、当初、もとの大規模国家の軍人出身か氏族民指導者出身の都市君主 *amīr* が統治したが、その弱体な指導力のため、都市名望家 *a'yān, wujūh, shuyūkh*（うち世襲的な家系が門閥。イスラーム社会は貴族が存在せず、子女による財産均等分割制であるため、本稿では名望家の用語を多用する）の支持に頼り、その協力を取り付けることが多かった。ホジスはこれをアアヤーン・アミール体制とよんでいる<sup>3)</sup>。さらに君主権が衰えるか、もしくは消滅すると、市民の自治都市が成立することになる。

シリアの中心的都市ダマスカスでは、イラクに拠点をおくブワイフ朝大將軍支配下のアッバース朝国家と、チュニジアからエジプトに拠点を移したファーティマ朝国家とのほざまで、10世紀後半の一時期、ライース *ra'īs* とよばれる市民指導者の下で、「都市共和国」（門閥または平民出身者による支配）が成立した時期をもつ。ファーティマ朝のダマスカス支配が安定すると、今度はファーティマ朝国家とビザンツ帝国、ついでセルジューク帝国とアンティオキアの十字軍国家とのほざまにあったシリア北部の大都市アレppoが、12世紀初頭の一時期に、判事（カーディー *qāḍī*）の指導下で門閥都市化した<sup>4)</sup>。

11世紀初頭には、アル・アンダルス（イベリア半島南部・東部・中部）のウマイヤ朝国家も崩壊し、多くのアンダルス人都市が自立して、門閥都市が成立した。ウマイヤ朝の首都であったコルドバ *Qurṭuba* で、官僚の一人が中心になった名望家の寡頭政が成立したのに対し、コルドバをしのぐ大都市に発展しつつあったセビーリヤ *Ishbiliya* では、判事（カーディー *qāḍī*）であった最大の地主アッバード *'Abbād* 家が単独指導権を確立して王と称し、アンダルス南部を統一する勢いを示した。11世紀末、イベリア半島北部のキリスト教国、とくにレオン＝カスティーリヤ連合王国やアラゴン王国の侵攻がさかんになると、防衛能力に欠け、キリスト教国に貢納するだけのタワーイフ（党派）諸王 *mulūk al-ṭawā'if* に対して、名望家・中下層民双方の市民の抵抗が活発になり、侵攻の矢面に立った大都市トレードヤバレンシアでは革命の結果、王が追放または弑逆され、門閥都市が成立した<sup>5)</sup>。

ファーティマ朝が361/972年にエジプトに移ったあと、ベルベル系サンハージャ *Ṣanhāja* 族出身の総督ズィーリー *Zirī* 朝の支配下にあったイフリーキーヤ *Ifriqiya*（ローマ時代のアフリカ、チュニジアを中心とした地方）でも、11世紀半ばにエジプトから侵攻したアラブ遊牧民ヒラール *Hilāl* 族による侵攻・定着（農地の牧場化）を受け、ズィーリー朝は449/1057年、首都カイラワーン *Qayrawān* を放棄して、サーヒル *Sāhil*（海岸）地方の旧都マフディーヤ *Mahdiyya* に避難した。ズィーリー朝の支配は、マフディーヤとその周辺だけに限られ、多くの都市が近隣のアラブ遊牧民に貢納しながらも自立した。うち、チュニス

11-12 世紀のチュニス 都市共和国か君主政都市か

Tūnis（これはフランス語の読み方であり、正しくはトゥーニス）とスーサ Sūsa（フランス語スース Sousse）では名望家の合議制に基づく門閥都市が成立したが、チュニスでは市民政府首班として選ばれたフラーサーン Khurāsān 家が結果的には指導権を世襲した<sup>6)</sup>。

#### b. イスラーム都市における門閥都市と平民都市

これらは、ウェーバーが正統的支配の諸類型としてあげた伝統的支配、カリスマ的支配、合法的支配（おもに近現代の官僚制）のどれにもあたらない「非正統的支配 die nichtlegitime Herrschaft, non-legitimate domination」ということになろう<sup>7)</sup>。ウェーバーは自治都市の類型として、地主層・大商人層を中心とした都市門閥の寡頭政下の門閥都市 patrician city と、中下層民に支えられた平民身分の富裕層が中心になる平民都市 plebeian city をあげた<sup>8)</sup>。しかし、支配層の個人がおもに中下層民の支持に頼り、一部の名望家とも同盟しながら、単独指導権確立を目指す場合（僭主制）も少なくなかった。ウェーバーはこれをも平民都市に含めているようであるが<sup>9)</sup>、イスラーム都市では別な類型と見なすべきであろう。北イタリア都市では、寡頭政のメンバーが固定した支配層を形成し、平民（ポポロ *popolo*）出身の新興の大商人・金融業者を排除したため、新興富裕層が中下層民を指導し、門閥支配の都市政府とは別に、平民だけの「国家内国家」としての政府を組織して（二重政府）、門閥から政権を奪取するが多かった。これに対し、イスラーム都市では、都市支配層が新参名望家に開放的であり、そのため平民都市は、中下層民出身者が同じ中下層民を率いて蜂起に成功し、名望家を抑えて政権を担う場合になりがちであった。一方、フランドル、ブラバントやドイツの諸都市のように、民主主義・共和政という理念はイスラーム都市には生まれず、市民自治の指導者の地位も世襲化する傾向が強かった。

本稿の目的は、ふつう中世や現代の学者・研究者によって「王朝」*dawla* と見なされているフラーサーン家指導下のチュニスに関して、他の自治都市と比較しながら、どういう実態をもち、それがどう変化したのか、とくに君主政都市といえるものに発展したのか、民衆がどうかかわったのかなどという基本的な諸問題を、従来の研究よりは多少なり深めることにある。ただ、史料がシリアやアンダルスの場合より貧弱であり、比較的詳細な先行研究としてはイドリースによるズィーリー朝史の大著がほぼ唯一のものといえよう<sup>10)</sup>。

#### c. 本稿で利用した史料

本稿で使用する史料は有名ではないので、紹介しておく。宮廷詩人イブン=シャラフ Ibn Sharaf (460/1067 年没) が書いたイブヌッ=ラキーク Ibn al-Raḡīq によるイフリーキーヤ史の続編があるが、かれはヒラル族によるイフリーキーヤ席捲後、シチリアのマザラ Mazara (アラビア語 Māzar), ついでアンダルスのアルメリーア Almeria (アラビア語 al-Marīya) に亡命した<sup>11)</sup>。かれの亡命後は、マフディーヤの天文学者・薬学者アブッ=サルト

Abu'l-Ṣalt (529/1135年没)と、ズイーリー朝王族のイブン・シャッダード Ibn Shaddād (生没年不詳)によるズイーリー朝史が基本史料になる。イブン・シャッダードは543/1148年にノルマン人のシチリア王がマフディーヤを占領し、ズイーリー朝を滅ぼしたあと、シチリアのかつてのアラブの首都パレルモ Palermo (アラビア語 Balarm)に移り、ついでダマスカスに移住した。この3人の同時代史料は散逸し、13-14世紀の歴史家・旅行家によって引用または要約されたものが利用できるだけである。イブン・シャラフとアブッ・サルトの歴史は、モロッコのイブン・イザーリーや、チュニスのティジャーニー、イブン・ハルドゥーンに、イブン・シャッダードの歴史は、イラク北部モースルのイブヌル・アシル、シリアのイブン・ハッリカーン、アブル・フィダー、エジプトのヌワイリー、マクリーズイー、それにティジャーニーに利用されている。とくにティジャーニーの旅行記は、長文をそのまま引用しているため、非常に貴重であるが、肝心のチュニスの記述が少ない。また、アンダルスのバクリー (487/1094年没)と、アンダルス出身でパレルモのノルマン王の宮廷で活躍したイドリースイー (560/1165年頃没)の有名な世界地誌も、同時代の貴重な報告を含んでいる。一方、社会学者として知られるイブン・ハルドゥーン (近い先祖がアンダルスのセビーリヤからチュニスに亡命)は、氏族別にアラブ遊牧民の豊富な口承伝承を伝えているが、正確な年代が不明な場合が多い (Kd 11/27-174)。

同時代の文書でただ一つ現存するのは、552/1157年にフラーサーン家のアブドゥッラーの名で友好国ピサの大司教あてに出された公的なアラビア語の書簡である。これはピサ市民を含む西欧人捕虜を乗せたアレクサンドリアの海賊船がチュニスに立ち寄ったことに対するピサの抗議に応え、善処を約束したものである。同時に、ピサ大使と口頭で合意した通商協定 (穀物輸入の減税やみょうばん輸出の関税免税)の内容を確認している<sup>12)</sup>。

史料の欠を多少なり補えるものは、同時代の建築物や墓石の碑文であり、碑文は、ツビスが大著に収集している<sup>13)</sup>。建築物については、ザイトゥーナ Zaytūna モスクの東面、ファッカーフ (果物商人)市場 Sūq al-Faqqāh 側の大階段、北面、アッターリーン (香料商人)市場 Sūq al-Attārīn 側の北門が11世紀後半の作であるほか、フラーサーン家が12世紀初頭に建設した城塞地区アル・カスル al-Qaṣr のモスクが現存する。これと広場を挟んだところに位置する広大なダールル・フサイン Dār al-Ḥusayn 宮殿は18世紀に大幅に改造、拡大されたが、12世紀初頭のフラーサーン家の宮殿が原型である。旧市街のマナーラ Manāra 門 (アルタ Arṭa 門)の付近には、ドームを戴いた四角形のフラーサーン家の廟 *qubba* (現在は Sīdī Bū Khriṣān とよばれている)も良好な状態で保存されている。

以下に本文で引用した史料とその略号を列挙しておく。

A: Ibn al-Athīr, *al-Kāmil fī'l-Ta'rīkh*, 13 vols., ed. C. Tornberg, Beirut, 1965-7.

Bakri: Abū 'Ubayd al-Bakrī, *Kitāb al-Masālik wa'l-Mamālik*, as *Description de l'Afrique Septentrionale*, ed. McGuckin de Slane, Paris, 1965.

11-12 世紀のチュニス 都市共和国か君主政都市か

Bs: Ibn Bashkuwāl, *Kitāb al-Ṣila fī Ta'rīkh A'immat al-Andalus*, 2 vols., Cairo, 1983. (ページは通し番号)

Id: Ibn 'Idhārī, *al-Bayān al-Mughrib fī Akhbār al-Andalus wa'l-Maghrib*, ed. C. S. Colin & E. Lévi-Provençal, 4 vols., Beirut, 1980. (引用は Vol. 1 のみ)

Idrisi; al-Idrīsī, *Kitāb Nuzhat al-Mushtāq fī khtirāq al-Āfāq (Kitāb Rujār)*, 2 vols, Cairo.

Kd: Ibn Khaldūn, *Kitāb al-Ibar*, 14 vols., Beirut, 1983-6.

Khallikan: Ibn Khallikān, *Wafayāt al-A'yān*, ed. Iḥsan 'Abbās, 8 vols., Beirut, 1972.

M: al-Maqrīzī, *Ittī'āz al-Humafā*, ed. Muḥammad 'Abd al-Qādir 'Aṭā, 2 vols., Beirut, 2001.

AM: 'Abd al-Wāḥid al-Marrākushī, *al-Mu'jib fī Talkhīṣ Akhbār al-Maghrib*, ed. R. Dozy, Leiden, 1881, reprint, Amsterdam, 1968.

N: al-Nuwayrī, *Nihāyat al-Arab fī Funūn al-Adab*, 34 vols., Beirut, 2004. (引用は vol. 24 のみ)

T: al-Tijānī, *Riḥlat al-Tijānī*, ed. Ḥasan 'Abd al-Wahhāb, Tunis, 1958.

## 1. イスラーム都市をめぐるこれまでのおもな議論

### a. ウェーバー, フォン・グルネバウム, ブリュンシヴィらによるイスラーム都市一般論

イスラーム都市を世界史的な視野で最初に論じたのはウェーバーである。ウェーバーは中国やインドの都市を、「民族的」「呪術的」紐帯に基づくに過ぎず、その紐帯が市民間の兄弟誓約 *confraternization* の成立を妨げたと一蹴する一方、古代シリア・イラク都市やイスラーム都市を、民族的、呪術的紐帯が比較的弱く、兄弟誓約への障害がより小さいと認めたものの、それ以上の分析を避けた<sup>14)</sup>。これには、ウェーバーの問題意識の根底にある西欧の独自性がいまいになることへの恐怖があったと指摘することは大胆すぎるであろうか。その結果、かれの議論は、古代ギリシア・ローマ都市と、10-11 世紀以後の北イタリア・北欧都市とを比較し、その双方の政治史におけるパラレルな発展に注目しつつ、なぜ北欧の都市にだけ近代資本主義が発達し得たのかという問題に収斂していった。

また、ウェーバーは市民の中でも、ギルドや宗教結社に組織された誠実、勤勉な商人・職人こそが、倫理性・合理性をもった、禁欲的救済宗教(キリスト教、とくにプロテスタンティズム)の担い手であるとし、西欧都市にユニークな特徴とした。しかし、オスマン帝国以前にイスラーム都市にはギルドがなかったとしても<sup>15)</sup>、同業者が狭い通りに集中して店を並べるイスラーム都市では、同業者間では何らかの連帯があったはずであるし、12-13 世紀以後の後期イスラーム都市ではスーフイズム(神秘主義)の多くの教団が爆発的に成長し、大半の職人・商人を信徒として組織したことはよく知られている。ウェーバーもイスラーム都市と西欧都市との違いを明確化することに苦慮し、そのため、ヴェルハウゼン、ゴルト

ツイーハー、ベッカー、ヒュルフローニエなど当時の最高のイスラーム学者の研究に依拠しながら、イスラームが救済宗教などではなく、被征服民から税を取り上げる軍人の身分的利益と奢侈的（禁欲的でない）生活様式を正当化するための軍人の宗教にすぎないと、非常に無理な立論をせざるを得なくなった。この点は、ターナーが指摘するように、ウェーバー社会学最大の弱点の一つとなっている<sup>16)</sup>。

西欧人のイスラーム学者でさえ、イスラーム都市がいかに西欧都市と異なるかを指摘することに熱心であった<sup>17)</sup>。フォン・グルネバウムは、イスラーム都市は普遍的なイスラーム法（シャリーア *sharī'a*）を施行するだけで、都市独自の法をもたず、周辺の農村部との制度上の区別ができなるとした。ブリュンシヴィによれば、個人の利益を公共の利益より優先するイスラーム法には、法人の概念がなく、市民は同じイスラーム法を施行する他都市の市民との法的区別がなく、市民自治の概念もないと論じた。同時に、イスラーム法は、ただちに直接に他者との衝突がないかぎり、個人が自由にふるまうことを許容するため、市民統合に向けての集団意識の育成を阻害すると指摘した。さらにスターンは、イスラーム都市にはギルドがないだけでなく、古代都市との連続性が消滅し、市民自治の組織や官職もまったく残らなかったと強調した。ただ、シャツミラーはギルドの代替物として、フトウワ *futuwwa*（若者特有の正義感と任侠精神）に基づく職業的結集、同一スーフィー教団員の仲間意識を指摘したほかに、かの女がアラビア語史料から抽出した598にも及ぶ非常に細分化された職人・商人の職種内部での何らかのまとまりを推測している<sup>18)</sup>。

これらの指摘は、中世西欧都市との比較においては真実の部分も少なくない（とくに個人の自由の「最大限」の許容）。しかし、西欧都市でも都市法だけが施行されていたわけではないし（しだいにローマ法や議会法、君主の制定法が有力になる）、イスラーム都市でも、ダマスクスやバレンシアでは灌漑の用水分割法のように、都市法が存在し、後者では大モスクの門（現カテドラルのApostoles門）前で市民注視の中、市民による裁判が行われた（現在も継続、ユネスコ無形文化遺産<sup>19)</sup>）。

ウェーバーはカーディー（判事）の「恣意的」判断に基づくイスラーム法の運用と裁判を非合理的と断じ、自治都市や禁欲的生活態度の欠除とともに、合理的資本主義が成長しなかった根本原因としたが、一方では、判例重視のイギリス法の例に拠って、非合理的な法規範の下でも資本主義の発展は可能と認めざるを得なかった<sup>20)</sup>。実際は、ウェーバーが時代や地域を超えた不可変の硬直した法としたイスラーム法の解釈・運用は、オスマン帝国下でも、権威的の法解釈者ムフティー *muftī* が出す法意見ファトワー *fatwā* などによって、各都市の法慣行やアドホックの問題ごとの合理的解釈に従わされていた<sup>21)</sup>。

また、ロダンソン以来、中世イスラームで資本主義が萌芽的にかなり発達したことは定説である<sup>22)</sup>。イスラーム世界やビザンツ、南イタリアにおいて資本主義の成長が途中で挫折したのは、宗教的制約や禁欲主義・合理主義・企業家精神の欠除のためというより、強大な

政治勢力の発達を促す相対的に高い生産性があったために、資本主義を担うべき大商工業者層が官僚・軍人の支配に抗しきれず、土地への投資（地主化）に回帰していったからである<sup>23)</sup>。中世末期に生産性の向上、商工業の発達が進んだ北イタリアでも、ヴェネツィアやフィレンツェ、ミラノ、ジェノヴァなどが強大化して大きな領土を獲得し、都市国家の枠組みから脱した。ヴェネツィアは富裕市民（貿易金融商・大地主）の寡頭政に基づく共和政を守ったが、ミラノなどは君主政に移行した。北欧でも、官僚制や常備軍を完備した王権がしだいに強化され、自治都市は衰退に向かった。

#### b. アシュトル、カエン、ハフェマンらの実証的個別イスラーム都市研究

イスラーム諸都市の実証的歴史研究を通じて、通説をいちやく徹底的に批判したのがアシュトルである。かれは、11世紀末-12世紀半ばのダマスクスのライース（事実上スーフィー *Ṣūfī* 家の世襲）に注目し、これをアフダース *aḥdāth* とよばれる市民兵に支えられてダマスクスを事実上支配しようとした「市長」または「警察長官」であると考えた。ライースは名望家層 *haute bourgeoisie* を代表して、一方でダマスクスを征服した外部勢力、トルコ人のセルジューク朝、ブーリー朝、ザンギ朝の王に、他方では下層民に対して対抗した。アシュトルはこれを名望家中心の都市自治を目指す運動と位置づけ、この都市自治の伝統はヘレニズム都市からローマ時代を通じて連綿としてつづいており、制度的にも、ライースは警察長官 = 騎兵隊長 *hipparchos* の、市場監督官（ムフタスイブ *muḥtasib*）は *agoranomos* の継続であると論じた。ダマスクスの都市自治が衰退していったのは、ザンギ朝以後の強力な集権的支配の下であるとした<sup>24)</sup>。

ついでカエンは、10-12世紀のシリア諸都市の包括的研究の中で、10世紀末-12世紀初頭のダマスクス、アレppoなどで王の支配から脱した市民自治を見出し、ライースが権力基盤としたアフダースをビザンツ支配下のイタリア都市の兵ミリテス *milites* と同様と考え、11世紀末に至るまでのシリア都市とイタリア都市の類似性を指摘した。またカエンはライースだけでなく、判事カーディーや市場監督官ムフタスイブも市民知識層から選任され、市民自治の中心になり得たとし、さらに、アフダースを、イラン・イラクのアイヤール *'ayyārūn* と区別し、後者の軍人支配者に同調的な無頼性に比べ、ライース指揮下で市民自治を守る秩序ある下層民出身の市民兵と位置づけた<sup>25)</sup>。

カエンの研究やスターンの批判を受けたあと、アシュトルは自説を修正し、古代のシリア都市はイタリア都市と同様に、アッバース朝期にいったん衰退し、10世紀に貿易の興隆とともに復活して、富裕商人、中下層民双方の実力が増大し、両者は対立をかかえながら、ダマスクスではスーフィー家がライースとなった1069年ごろには、協力してファーティマ朝駐留軍を追放し、事実上の自治の樹立に至ったと、考えるようになった<sup>26)</sup>。

さらにハフェマンは、常備軍と官僚群を擁した大規模な家産制国家が再建されたあとも、

シリアではアフダースは王の補助軍として利用されつづけ、その長としてのライースが王の高官の一人として生き残ったことを正しく指摘した<sup>27)</sup>。アフダースやライースが自治都市を目指す市民運動と、家産制君主の官僚・兵士としての両面をもつことが、現代の学界におけるかれらの解釈を混乱させたといえる。

### c. 古代都市とイスラーム都市との連続性と非連続性

確かに、アパメア、ポストラ、ジェラシュ、ガダラ、アンマーン（フィラデルフィア）、バイサーン（スキュトポリス）など多くのシリアの大規模ローマ都市が、ウマイヤ朝期には多数のジュンド *jund*（軍団）に属するアラブ軍人の定着（都市壁内と郊外の荘園）を受け入れて存続したが、イラクに中心をおいたアッバース朝期に衰退、消滅したことはその遺跡から見て確かといえる<sup>28)</sup>。一方で、ダマスクス、アレppo、アンティオキア、エデッサ、ヒムス、イェルサレム、ガザなど多くの都市が、アラブ軍人の定着によって拡大し、その後も発展しつづけた。10世紀には、古代市民とアラブ軍人の子孫とが一体化し、名望家層はおもに都市領域内での農地の地代収入に依存していた。これに対し、西欧都市は、古代都市が復活した北イタリア都市であろうが、新設都市である北欧都市であろうが、10-11世紀における農業生産の拡大・商業の復活に基づいて興隆したものであり、しだいに聖俗領主と争いながら支配下の農業地域を拡大していった<sup>29)</sup>。

ローマ末期の都市の組織・制度がイスラーム時代に継続したかについては、確証はなく、市場監督官ムフタスイブを除いてその可能性は小さいというべきであろう。したがって、イスラーム都市のアフダースと同時代の南イタリア都市のミリテスがローマ末期の共通の組織の末裔と考えることもおそらく誤りであろう。ムフタスイブが自治都市で大きな役割を担うことはなく、名望家による自治の指導はアンダルスのセビーリヤやシルヴェス Shilb（現ポルトガル・アルガルヴェ地方）、バレンシア（後期）、シリアのアレppo（後期）、レバノンのトリポリ、リビアのトリポリ（中期）などのように、カーディーによって担われる場合がもっとも多く、それ以外では、ダマスクスやアレppo（前期）ではアフダースに基盤をおいたライース、アンダルスのコルドバやバレンシア（前期）では高官出身のワズィール *wazīr*（大臣）が中心になった。いずれの場合も、最初は市民の合意によって選出されても、自治が長期化した場合、政治指導は終身、そして世襲化する傾向があった。

アッバース朝初期まで活躍したアラブ軍人についても、10世紀以後はその存在が確認できず、多少残存していたとしても、自治都市樹立において大きな役割を果たすことはなかった。シリア都市のアフダース、バグダードのアイヤールは中下層民からなり、ジュンド（軍団）の残滓とはいえない。アンダルスやイフリーキーヤの諸都市でも、アラブ軍人の軍営都市として建設されたチュニスも含め、アラブ兵の存続は明確ではない。市民兵の組織化もシリアより不十分であり、特別な語は造語されず、市民兵は単にアーンマ *‘amma*（民衆）と

11-12 世紀のチュニス 都市共和国か君主政都市か

よばれるにすぎない。シリア、アンダルス、イフリーキーヤのローマ都市やアラブ軍営都市では、キリスト教徒やユダヤ教徒の市民が含まれていたが、11 世紀にはかなり少数派と化し（チュニスにおける言及は A 11/242）、史料にもほとんど言及されない<sup>30)</sup>。

## 2. ズィーリー朝の解体とイフリーキーヤ諸都市の自立

### a. イフリーキーヤ初の自治都市トリポリと外来征服者ハザル家・ノルマン王朝

イフリーキーヤで最初に自立した都市は、その東端に位置する現代のリビア共和国の首都トリポリ Tripoli（アラビア語、タラーブルス Ṭarābulus、ラテン語 Oea）である。トリポリを中心とする地方はローマ時代から、レプティス・マグナ（アラビア語、ラブダ Labda またはヒムス Khimṣ）、サブラータという大都市を擁した地中海沿岸の肥沃なジファーラ Jifāra 平野からなり、イフリーキーヤ中心部から遠いだけでなく、ガーベス Qābis（Gabès, Tacape）、カフサ Qafsa（Gafsa, Capsa）以南のチュニジア南部の乾燥地域で遮断されており、独自性が強かった。したがって、集権体制が緩んだとき、ここが真っ先に自立に向かうのはきわめて自然な成り行きである。

一方、現代のアルジェリア北東部にあたるクスタンティーナ Qusṭanṭīna（フランス語、コンスタンティーヌ Constantine、ラテン語 Cirta, Constantina）、セティーフ Saṭīf、ビジャーヤ Bijāya（フランス語 Bejaïa）、フドナ Ḥuḍna 盆地、ズィーバーン Zībān（ビスクラ地方）もまた、まとまった一つの地域としての自立性が高く、そのため、イスラーム暦 405/キリスト暦 1015 年にはズィーリー朝（ベルベル系サンハージャ族）の一族ハンマード Ḥammād が叛旗を翻して、フドナ山地（フドナ盆地北方）中に建設したカルア Qal'a Banī Ḥammād を首都に、この地に独立王朝を建設し得た。トリポリとフドナ盆地はチュニジア南部を通じて直接に連絡しており、391/1001 年には、ベルベル系ザナータ族の一派、マグラワ Maghrāwa 族の一部がズィーリー朝に敗れたあと、ハザル Khazar 家のフルフル Fulful b. Saīd b. Khazrūn の指導下で、フドナ盆地からガーベスを通ってジファーラ平野に移住し、トリポリを占領してその支配者となった（Kd 12/958, 13/83-6）<sup>31)</sup>。

その後、ズィーリー朝のムイッズ al-Mu'izz（406-54/1016-62）はハザル家のワッルー Warrū（フルフルの兄弟）を追放してトリポリを奪回したが、413/1022 年にはトリポリ総督が謀反を起こしてハザル家（ワッルーの子、ハリーフア Khalifa）の支配を復活させた（A 9/328; N 115; Kd 13/88）。ハザル家のトリポリ支配は、実効的かどうかはおいて、540-1/1146 年のシチリア王ルッジェーロ Ruggero 2 世（1105-54）による征服までつづいた。

ズィーリー朝支配復活後、市民勢力が台頭したことは、407/1016-7 年、郊外に多くの農園 *amlāk* をもつ有力市民であった法学者イブヌル・ムナンマル 'Alī b. al-Munammār al-Farādī が指導する市民蜂起によって、ファーティマ朝 = ズィーリー朝支持派が虐殺され、

アッバース朝カリフへの忠誠が宣言されたことでわかる。イブヌル・ムナンマルはライースとして市政を一時的に掌握したという。ハザル家支配復活後も、かれは影響力を保持しつづけたようであり、430/1039年のハザル家内紛時には、ハリーフアの子を支持したため、勝利したムンタシル al-Muntaşir (ワッラーのおい) によって、ジファーラ平野東部ミスラータ Misrāta 地方の村 *qurā* の一つ、ガーニーマ Ghānīma に追放された (T 265-7)<sup>32)</sup>。

444/1052-3年、カーディーのイブン・ファーディル Muḥammad b. Fāḍil al-Bakrī が市民と対立してトリポリから逃亡したあとは、他の法学者イブン・ハーニシュ ‘Abdullāh b. Muḥammad b. Ibrāhīm b. Hānīsh が 477/1084-5年に地位を失うまでの32年間、カーディー職とライース職の両方を握り、市民を指導しつづけたという (T 263)。したがって、トリポリはかなり名目的なハザル家支配下で、広範な市民自治を享受しており、通常のアミール・アァヤーン体制より門閥都市に近い形であったと考えてよい。

シチリア王ルッジェーロ2世はトリポリを占領し、駐留軍を置いたあとでも、イスラーム法施行と、マトルーフ Maṭrūḥ 家を中心とした名望家の自治を許容した。この自治はライースとよばれたマトルーフ家の長老 *shaykh* とカーディーを含む10人の名望家 *‘ayān al-balad, wujūh* からなる合議制であり、会議は総督が住む城塞 *qaṣba* の外側のモスクで行われた。これは門閥都市にほかならない。555/1160年にトリポリを含むイフリーキーヤ諸都市がアル・ムワッヒド帝国遠征軍に降伏したあと、10人の合議制は廃止されたとされるが、マトルーフ家を中心とした市民勢力は、586/1190年にマトルーフ家がアレクサンドリアに移住するまで、影響力を保持しつづけたようである (T 237,241-3; Kd 11/343-4, 12/958-9; A 11/108-9, 204; N 24/136; Khallikan 6/217; Idrisi 297)<sup>33)</sup>。

#### b. アラブ遊牧民の侵攻・ズィーリー朝国家の解体と首都カイラワーンの門閥都市化

トリポリと同じ407/1016-7年、首都カイラワーンでも、市民によるイスマエイル派 (ファーティマ朝支持派) 虐殺事件がおきたが (Id 268-9, 273-4; A9/294-5; Kd 11/28-9)<sup>34)</sup>、市民自治の成立には至らなかった。一方、ヒラール族は早くからエジプトからバルカ地方 (キュレーネ地方)、トリポリ地方に達しており、かれらの一派ズグバ Zughba 族が 429/1038年にハザル家支配者を殺したと伝えられるのは戦闘の結果であろう (T 267; Kd 89)。さらにヒラール族は、443/1052年、ガーベス近郊のハイダラーン Ḥaydarān の戦いで、ムイッズ指揮下のズィーリー朝・ハンマード朝軍とハザル家のムンタシル指揮下のザナータ族からなる連合軍を破り、一気にイフリーキーヤ中心部に進出し、カイラワーンを攻撃した (Id 289-93; N 119-20; A9/567-9; Kd 11/32-3; T 18)。この中で、内陸部の多数の都市と農地は、市民が逃亡して縮小に向かった。アラブ遊牧民が席捲する中、ムイッズも 449/1057年には、カイラワーンにサンハージャ族のカーイド Qāid b. Maymūn を残し、沿岸のマフディーヤに移らざるを得なくなった (T 328-30; Id 294, 298; Kd 1/34, 326-7; N

120; A 9/569)。カーイドはカイラワーンからチュニス<sup>35)</sup>に及ぶ一帯の防衛と統治を委ねられたというが、ヒラル族や近隣のベルベル系ハッワーラ Hawwāra 族の進出 (Kd 11/288; Id 294; N 126) には抗しがたく、3 年後にはマフディーヤに逃れざるを得なくなった (Kd 11/327; N 126-7; A 10/49-51)。この結果、諸都市は自立し、その多くが門閥都市となった。

ヒラル族は多くの氏族指導者の下で、それぞれ遊牧地の拡大、都市からの貢納徴収、隊商略奪 (または保護) に努めた。ムイZZは 3 人の娘をヒラル族の主力を成すリヤーフ Riyāḥ 族系ミルダース Mirdās 族の指導者 3 名に与えて (Kd 11/34)、その氏族民を傭兵として利用しようとしたというが、ヒラル族が協力するのは自らに都合のときだけであった。カイラワーン包囲の中心であったミルダース族は、ムーニス Mu'nis b. Yaḥyā al-Ṣinnabārī とアーミル 'Āmir<sup>36)</sup> b. Abī'l-Ghayth の指揮下にそれぞれ、ガーベス、チュニス方面に、他の集団はベージャ Bēja (Vaga) を中心としたもっとも肥沃な穀倉地域、メジェルダ Medjerda (Bagrada) 川流域やブーナ Būna ('Annāba, Hippona) 方面に進出した (Kd 11/33-4, 327)。ステップ地域のカイラワーン周辺には比較的弱小のズグバ族がとどまった。

一方、ミルダース族との闘争に敗れたアスバジュ Athbaj 族とアディー 'Adī 族はフドナ盆地に移り、ハンマード朝に協力するようになった (Kd 13/93-4; Id 294; N 121)。ただ、かれらは、ハンマード朝のナースィル al-Nāṣir (454-81/1062-88) が攻勢をかけた 457/1065 年のサビーバ Sabība の戦いで、ズィーリー朝軍に加わったミルダース族・ズグバ族側に寝返って、ナースィルの敗退を招いたとされる (A 10/44-6; N 122-4; Id 299; Kd 11/42-3, 355)。この敗北の結果、ヒラル族の侵攻に苦しむようになったナースィルも、数年以内に地中海岸のビジャーヤに都を築きはじめ、かれの子マンスール al-Manṣūr (481-98/1088-1105) は 483/1090 年、完全にカルアを捨てここに移った (N 124-6; A 10/46-9; Kd 11/43, 357-8)。

マフディーヤに逃亡していたカーイドは、サビーバの戦いの勝利後、ズィーリー朝のタミーム Tamīm (454-501/1062-1108, ムイZZの子) の命令でカイラワーンを奪回したようであるが、6 年後には勢力を回復しつつあったハンマード朝のナースィルに忠誠を誓った。タミームがカイラワーンを攻撃すると、カーイドはハンマード朝の首都カルアに逃れ、カイラワーンはズグバ族の手に落ちたもようである。さらに 6 年後 (470/1077-8 年)、ズグバ族がミルダース族に強く圧迫されると、カーイドはナースィルに忠誠を誓っていたスファークス Ṣafāqus (Sfax) の支配者ハンムー Ḥammū b. Mallīl のもとに移り、ズグバ族<sup>37)</sup>に金銭を支払って、平和的にカイラワーンを奪回し、その城壁を強化した (Kd 11/327; N 126-7; Id 300; A 10/51)<sup>38)</sup>。カーイドの 3 回目の統治もまた短期間に終わったようであり、以後、カイラワーンはヒラル族かハッワーラ族に貢納する一方、市民自治を行ったようである。

## c. イフリーキーヤ諸都市の自立（門閥都市とアヤーン・アミール体制都市）

他の多くの諸都市でも名望家の寡頭政が実現した。内陸部カステーリヤ地方の主要オアシス都市トゥーズル Tūzur では、市民指導者 *ra'īs*（アラブ系タヌーフ Tanūkh 族）、ヤムルール家 Banū Yamīlūl のヤフヤー Yaḥyā b. Muḥammad の指導下で有力市民 *mutaqaddamūn* の合議 *shūrā* による自治が行われた（Kd 12/928-9）<sup>39</sup>。ただ、近隣の内陸都市カフサでは、ジェルバ島出身のズイーリー朝の総督 *'āmil*（ランド家 Banu'l-Rand）がアラブ遊牧民に貢納 *itāwa* を納めながらも自立し、さらにトゥーズルをも支配下に収めた（Kd 11/338-9）。したがって、トゥーズルの市民自治は短期間に終わった。

12世紀初頭までには、メジェルダ川下流域の小都市トゥブルバ Ṭuburba（Thuburbi Minus）では、名望家 *shuyūkh* の一人が市政の中心となったが（Kd 11/347-8）、メジェルダ川中流域の中心都市ベージャでは、名望家 *shaykh* の一人イブン・ヤザール Maḥmūd b. Yazāl が、付近の砦 *qa'la* に拠ったハンマード朝のサンハージャ族軍人を招いてアラブ遊牧民からの防衛を任せられた<sup>40</sup>。このサンハージャ族軍人は「盗賊 *dhu'ār*」を糾合して近隣の略奪を働いたが、内陸都市ケーフ al-Kāf（Shiqqabanāriya, Sicca Veneria）でも、市民の一人、アイヤード 'Ayyād b. Naṣr Allāh al-Kalāī が雑多な「盗賊 *ahl al-dhi'āra*」や遊牧民を傘下に収めて君主化し、アラブ遊牧民の侵攻に苦しんでいた近隣の都市ウルブス al-Urbus（Lares）をも支配下に収めた（Kd 11/349）。

このようにアラブ遊牧民は必ずしも従来の氏族の枠組みにとらわれず、ベルベル系山岳民やアラブ化した市民・農民を含む雑多な出身者を含め、日常的な法規範から脱して、略奪に活路を見出し、新たな指導者の下に結集を見せることもあった。都市民・都市近郊農民から見れば、かれらは盗賊集団にすぎないように見えたであろう。

海岸都市もつぎつぎとズイーリー朝から独立した。マフディーヤから近いスーサでさえ、シャイフとよばれる名望家の合議 *shūrā* が 445-6/1054 年に成立し、456/1064 年にズイーリー朝のタミームに屈するまで、独立していた（T 28-9; Kd 11/326; Id 293, 299）。スファークスではベルベル系バルガワータ族 Barghawāṭa のズイーリー朝総督の従兄ハンムーが 451/1059 年に総督を暗殺して独立した。かれは近隣のアラブ遊牧民に貢納を約束してその矛先を避ける一方、ファートイマ朝の宗主権を否認してアッバース朝に忠誠を誓い、マフディーヤを攻撃さえした。しかし結局 493/1100 年、経済力・海軍力に勝るズイーリー朝の方がスファークスを占領した。（T 70-1; Kd 11/326, 344; Id 294, 302; A 10/298）<sup>41</sup>。

チュニジア北端の港湾都市バンザルト Banzart（フランス語、ビゼルト Bizerte）では市民が二派に分かれて争いあった結果、「盗賊 *dhu'ār*」を集めて、山岳の砦を拠点に村々 *qurā* から貢納 *itāwa* を徴収していた武装集団の指導者ワルド Abu'l-Rajā' Ward al-Lakhmī が一方の派から招かれて市の支配者となった。アラブ遊牧民からの防衛を委ねられたワルドの支配は有力市民の意向を汲んだ門閥都市的なものであったとみられ、子、孫、曾孫と継承

11-12 世紀のチュニス 都市共和国か君主政都市か

され、552/1157 年ごろにアル・ムワッヒド帝国に降伏するまでつづいた (Kd 11/345-6)。

アラブ遊牧民の攻撃に耐えてきたガーベス<sup>42)</sup>でも、ズィーリー朝の総督、ムイッズ Mu'izz b. Muḥammad (サンハージャ族)<sup>43)</sup>がズィーリー朝高官であった二人の兄弟とともに反乱を起こし、近隣のミルダース族の指導者ムーニスに忠誠を誓った。489/1096 年、市民が蜂起して支配者を殺し、ズィーリー朝の王子に政権を委ねたが、まもなくリヤーフ族の一派、ダフマーン Dahmān 族の指導者、イブン・ジャーミー Maggan b. Kāmil b. Jāmi'<sup>44)</sup>がガーベスを支配するようになった。こうして、ガーベスではアラブ遊牧民の指導者が世襲的な支配者となり、ジャーミー家の支配は 555/1160 年にアル・ムワッヒド帝国に屈するまでつづいた (T 96-100; Kd 11/328, 340-3, 12/945-6; Bakri 18-9; N 129; A 10/257; Id 302)。

以上の中で、ズィーリー朝の総督やその一族が周辺アラブ遊牧民と妥協しながら、独立したスファークス、ガーベス、カフサなどは近隣諸都市を従えようとした。トリポリ、ベージャ、バンザルトなど、名望家市民が政権を指導した諸都市では、アラブ遊牧民から独立を守るため、市民自治の一部を放棄して外部からベルベル系やアラブ遊牧民出身者を含む武装集団を招かざるを得なかった。さらにケーフでは有力市民の一人が外部集団を利用して君主化に成功したようである。アラブ遊牧民指導者が都市に居住して直接に支配するようになったのは後期のガーベスだけのようである。一方、名望家支配を貫いたスーサやトゥーズルの市民自治は短期間に終わった。市民自治が長期化したのは、チュニスのほか、イブン・ハーニシュやマトルーフ家指導下のトリポリと、アラブ遊牧民に貢納しながら、市民自治を行ったと見られるカイラワーンだけのようである。

### 3. チュニス自治都市の成立

#### a. アブドゥルハック・イブン・フラーサーン首班下でのチュニスの門閥都市化

チュニスでも、イスマーイル派やファーティマ朝に対する広範な市民の反発が存在した。406/1016 年、スンナ派の復興を叫んで市民の敬愛を集めていた禁欲的教師 al-mu'addib al-'ābid (のちのチュニスの「守護聖人」)、ムフリズ Muḥriz b. Khalaf の扇動もあって、多くのイスマーイル派が市民によって殺害された<sup>45)</sup>。423/1032 年、市民間でムイッズが自ら出向いて鎮静化に努めなければならないほどの闘争が起きたのも (A 9/426)、これと関係している可能性がある。ハイダラーンの戦い後は、チュニスはマフディーヤやスーサと同様、カイラワーンなどから避難民を受け入れたもようである (Kd 11/33; Idrisi 285)。

相対的にズィーリー朝より強力になったハンマード朝のナーシルに対し、カイラワーン総督カーイドやスファークスの支配者も忠誠を誓った。この状況下で、チュニス市民も、アーミル配下のミルダース族が郊外まで侵攻し、貢納を要求するようになると、ナーシルに保護を求めざるを得なくなった。イザリー (p. 315) は次のように述べている。

かれら（アラブ）は、チュニスとその近辺の諸都市、ベージャやウルブスを包囲するに及んだ。イフリーキーヤ領有に野心を抱いていたハンマード朝はアラブに取り入り、贈り物を与えたため、カイラワーンの支配権も一時は手に入れた。ムイZZの支配はチュニス等からも消滅し、マフディーヤにおけるかれの王朝も、防衛が困難になり、弱体化した。こうしてチュニスの名望家 *ashyākh* は、当時のハンマード朝の王城カルアにナースィルを訪ね、チュニスを統治下に収め、かれのもとから総督 *wālī* を派遣してくれるように要請した。ナースィルはかれら自身の中から一人の名望家 *shaykh* を選び、自分の統治がつづくかぎり<sup>46)</sup>、市政を執行させるように、かれらに命じた。仲間の中から一人の長老 *kabīr* の擁立を望んだのは名望家の方であったといわれるが、推された本人が固く辞退した。そこでアブドゥルハック・イブン・アブディルアズィーズ・イブン・フラーサーン 'Abd al-Ḥaqq b. 'Abd al-'Azīz b. Khurāsān がナースィルによって任命された。かれは488/1095年に死ぬまで総督として統治した。

一方、ハルドゥーン (11/334-5) は次のように伝えている。

アラブがカイラワーンを抑え、ムイZZがマフディーヤに移ると、イフリーキーヤは戦乱状態に陥り、アラブが諸州 *'amālāt* を分割した。スーサ、スファークス、ガーベスなど、多くの諸都市はバーディース家の王（ズィーリー朝）に背き、イフリーキーヤの人々はカルアのハンマード朝になびいた。前述したように、同王朝はカイラワーンを支配下におき、チュニスもまたムイZZの支配下から脱した。その名望家 *mashyakha* の使節が訪れたナースィルは、アブドゥルハック・イブン・アブディルアズィーズ・イブン・フラーサーンを総督として任命した。アブドゥルハックはチュニス市民の一人であるというが、どうもサンハージャ系諸部族 *qabā'il* の出身のようである。かれは市政を執行するにあたり、市民を政治に参画させ、市民の人気をとり、市民を優しく遇した。一方で、近隣のアラブの略奪を避けるため、アラブには定額の貢納 *itāwa* を収めて和平を結んだ。…488年に死ぬまで、かれは統治をつづけた。

両者の記述はほぼ重なり、おそらくイブン・シャラフもしくはアブッ・サルトに基づくものと思われる。市民の目的はナースィルの保護を得ることであり、イザーリーの記述によって、市民が最初から自治を行うつもりで、自分で選んだ市民指導者をナースィルに追認させたと推測される。ただ、アブドゥルハックは第二候補にすぎなかったようである。かれは名望家を表すシャイフの称号を名のるだけで、それ以上の君主的な称号をもたなかったことは、ザイトゥーナ・モスクのアッターリー市場側の小門にクーフィー書体で刻まれた474/1081年の碑文によって確認できる<sup>47)</sup>。

慈悲深く、慈悲あつき神の御名において。預言者ムハンマドに神の祝福と平安あらんことを。これはシャイフのアブー・ムハンマド・アブドゥルハック・イブン・アブディルアズィーズ・イブン・フラーサーンが474年ラマダーン月に建設を命令したものであ

る。アブドゥルガニー・イブヌル・マッリーリー 'Abdulghanī b. al-Mallīhī とイワド・イブヌル・カビーティー 'Iwāḍ b. al-Qabīṭī が施工にあたった。

イドリースはハルドゥーンの推測に従って、アブドゥルハックをズイーリー朝、ハンマード朝と同じベルベル系サンハージャ族としている<sup>48)</sup>。しかし、この推測は、民主政や共和制という概念をもたないハルドゥーンの世界史の構成が諸国をアラブ系、イラン系、トルコ系、スラヴ系、ベルベル系、黒人（スーダーン）系等の諸王朝に分類し、チュニス門閥都市をフラーサーン家のベルベル系王朝としてとらえたことに基づくにすぎず、信用できない。フラーサーン家は、ファーティマ朝に滅ぼされたアッバース朝総督アグラブ朝と同様、アッバース朝初期にベルベル人の反乱鎮圧のために派遣されたフラーサーン地方（イラン北東部、トルクメニスタン南部）出身者からなるフラーサーン遠征軍の兵士出身と考えるべきであろう。このときフラーサーン軍兵士はカイラワーンやチュニスに定着し、多くが不在地主化し、都市名望家の大きな部分を占めるようになっていたからである<sup>49)</sup>。こうして、チュニス市民はハンマード朝の宗主権下で、自ら選んだ名望家を中心にした門閥の寡頭政に基づく市民自治（門閥都市体制）を確保することができたと考えてよい。

#### b. チュニス門閥都市の運営と市民の軍事化

チュニスの合議制の実態について詳細な情報はない。ツピスは想像をふくらませて、「市の行政は、メンバーが品行方正と権威で知られた人々（割当があったわけではないが、学者、宗教家、預言者の子孫、大商人、大工房の親方、船主など）か、もしくは市のさまざまな利害の代弁者からなる会議体に委ねられた。いずれの場合でも、メンバーとして指名されたならば、元老院議員というべきシャイフの称号を与えられた。この会議体はいってみれば元老院のようなもので、その議長は特別な称号をもたず、他の議員と同様に単にシャイフとよばれた」と論じている<sup>50)</sup>。またイドリースは、この寡頭政がベルベルのジャマーア *jamā'a* に近いものと考えている<sup>51)</sup>。しかし、ジャマーアは生産性が低く、成員平等が徹底したベルベル山岳民の氏族社会における、家長または成年男子全員からなる氏族会議のことであり、階層分化が著しい富裕な都市の名望家層の会議体とはまったく性格が異なる。

アブドゥルハックは、第一候補者が辞退したあとに選ばれた選任過程から見て、当初は、他の名望家と比べ、合意形成のプロセスで特別な権限をもたなかったと考えるべきであろう。ザイトゥーナ・モスクのファッカーフ市場側の大門にある碑文によれば、「これは法学者 *faqīh*、ムフリズの子ムハンマドの子であるカーディーのアブドゥッラフマーンが 457/1064 年ラビー初月に命じてつくらせた」とあり<sup>52)</sup>、大モスクの主門の建設を別な名望家が行いえた事実は、アブドゥルハックの支配が決して独裁ではなかった証しであろう。ただ、合意形成がモスクや私邸などに集まった会議（たとえば金曜日の集団礼拝のあと）で行われたのか、それとも意見表明が個別に行われ、集約されたのかもわからない。前者の場合、アブ

ドゥルハックは会議の流れに任せ、議論が煮つまってほぼ一致した意見に従ったものであろうが、後者の場合、実力に応じて意見が尊重されるが、決定過程の透明性は薄まり、指導者の恣意性は高まる。のち、かれの孫アフマドは、信頼する側近市民の助言を得て決定し、市民に同意を求めるようになった可能性が十分にある。

合意形成に参加し得た名望家の数や参加資格も不明である。おそらく土地財産をもち、イスラーム的教養（伝承学、法学、神学、文法学、歴史学、天文学・数学、医学など）があり、できれば父祖の時代からチュニスの名望家であることが、一応の条件にはなったであろうが、大貿易商・金融業者や他所から移住してきた新参者を排除しなかったはずである。学識が重要であり、アブドゥルハックも、かなりの学者であった父や文法学者であった叔父ムハンマド (Bs 86) から学んでいたであろうことが有利に働いたと見てよい。

自立したことによって、市民は市防衛の責務を負わねばならなくなった。チュニス自治にとって初期の大きな試練は、457/1065年、サビーバの戦いでハンマード朝のナースィルがズイーリー朝を支持したアラブ遊牧民のリヤーフ族、ズグバ族らによって敗退したときに訪れた。翌年、ズイーリー朝のタミームがサンハージャ族などからなる騎兵 *ajṅād* や黒人歩兵 *'abīd*、さらにズグバ族など雑多なアラブ部族民からなる遠征軍を率いて、最初にカイラワーンを攻め、総督カーイドを追放したあと、チュニス支配を回復しようとしたが、14か月の包囲<sup>53)</sup>に耐えた市民の頑強な抵抗に直面した。結局、チュニスがズイーリー朝に忠誠を誓う形で、タミームが撤兵した (Kd 11/335; Id 299; N 126-7; A 10/50-1)。この和平はタミームの面目が立つ程度のもので、その支配が実質化することはなかった。

市民の軍事化は、ハンマード朝による直接支配期の543/1148-9年、市民がバフル（海門 Bāb al-Baḥr 外の港側で、門の上の税関 *dīwān* にいた総督による閲兵 *'arḍ* を受けていたという記事 (Id 313) によって確認される。これは歩兵であるが、アル・ムワッヒド帝国によるチュニス占領時には、市内から出撃した大きな騎兵隊があったという (AM 162)。アラブ遊牧民を別にして、市民騎兵は、市民化していたサンハージャ族軍人が多くを占めていたであろうが、アラブ征服時とアッバース朝初期にチュニスに大量に定着したアラブ騎士やフラーサーン軍団騎士の子孫が少数いた可能性は否定できない。チュニスは、近隣のシャリーク *Sharīk*（ボン岬 Cap Bon）半島の良港ヌーバ *Nūba* (Nawāṭīya, 現在の Sidi Daoud) が馬の名産地として知られ、馬の確保は容易であったはずである<sup>54)</sup>。

また、近隣のアラブ遊牧民や「盗賊」は、チュニス郊外の農業地域の略奪や隊商の襲撃を行う一方で、市民によって同盟者または傭兵としても利用された。このような集団の指導者も、雑多な人々をひきつけ、平時の倫理的規律を破り、もっぱら略奪品の獲得によって集団の需要を充足させたことをもって、カリスマ的指導者と見ることもできよう<sup>55)</sup>。

財政的には、名望家支配は財政的援助（給与）を必要としない名望家の余暇を利用し、新しい有給官職を設置したり、公共建築物を公費で建てたりしないかぎり、ほぼタダ同然で

あり、武装も各市民の自弁であった。多くの名望家支配に見られるように、カーディー等の選任のほか、行政行為は常設的（継続的）、組織的（網羅的）ではなく、最小限にとどめられ、たまたま生じた問題点や事項をアドホックに処理したにすぎないと思われる<sup>56)</sup>。

#### 4. 寡頭政から「君主化」へ

##### a. イスラーム都市における世襲的な指導権継承

寡頭政が長くつづいた場合、コルドバのジャフワル Jahwar 家、バレンシアのルーバシュ Rūbash 家、レバノン・トリポリのアンマール 'Ammār 家のように、首班（前二者は官僚出身のワズィール、後者はカーディー）の権力が強化され、地位も世襲化しがちであった。フラーサーン家の場合も同様であった。一般に北イタリア、北欧の門閥都市では、一人の市民の指導権が確立することを避けるため、最高官吏複数制や短期任期制（再任不可）をとるか、あるいは拒否権や任期終了後の執務審査権をもつ他の官職や会議体を設置していたが、イスラーム都市では、指導者は一人制で、任期は無期限であった。これはムスリムが法人としての国家や公共体 *res publica*、民主政という概念をもたず、王朝 *dawla*（王政 *mulk*）やカリフ制 *khilāfa*、あるいはハルドゥーンがいう氏族の血の絆に基づく団結（アサビーヤ *‘aṣabiya*）と新王朝樹立という概念しか持たなかったためと考えられる。

##### b. アブドゥルハックの 2 子による門閥都市指導権の継承と「君主化」志向の芽生え

チュニスの場合、アブドゥルハックが 488/1095 年に老齢で死ぬ前に、二人の子がその役割を代行していた証拠がある。チュニス旧市街北部、スワイカ（小市場）門 Bāb al-Suwayqa 付近のムフリズ廟<sup>57)</sup>の前に、ムフリズ・モスクがあるが、その門の大理石の石板は創建当初の作であり、次のような角張ったクーフィー書体の碑文が刻まれている<sup>58)</sup>。

このモスクの建設は、もっとも偉大なシャイフ *al-shaykh al-ajall*、アブー・ムハンマド・アブドゥルアズィーズ・イブン・アブディルハック・イブン・フラーサーンが 485 年ラマダーン月/1092 年 10-11 月に命じたものである。……シャイフのアブドゥラフマーンとムハンマド・イブン・アリー（が施工にあたった?）。

一方、フラーサーン家のドーム廟には、次のようなクーフィー書体の碑文がある<sup>59)</sup>。

このドーム廟 *qubba* の建設は、シャイフのアブドゥルハック・イブン・アブディルアズィーズ・イブン・フラーサーンの二人の子、勝利を与えられたスルターン *al-sultān al-mansūr* たるアブー・ムハンマド・アブドゥルアズィーズ……とアブッ・ターヒル・イスマーイール Abu'l-Ṭāhir Ismā'īl が……486 年ジュマダー後月/1093 年 6 月に命じたものである。……アブドゥルガニー・イブヌル・マッリーリーが施工にあたった。兄弟が建てたドームの下に兄弟の墓が安置された。アブドゥルアズィーズの墓誌銘には、

かれが499年1月5日/1105年9月17日に死んだと記され<sup>60)</sup>、称号は単にシャイフとあるだけである<sup>61)</sup>。一方、少しのちに制作された弟イスマーイールの墓誌銘には、かれが500年7月12日/1107年3月8日に死んだと記され、シャイフのかわりにより指導性が強いアミール *amīr* (指揮官, 総督, 王子などに用いられる) の称号が用いられている<sup>62)</sup>。

ツビスは、スルターンという称号から、アブドゥルアズィーズがズィーリー朝にとってかわって、イフリーキヤ全域の征服を目指したと推測するのに対し、イドリースは、かれが精彩のない弱い人物 *mud'if* とする記述 (Kd 11/335) に拠って、アミールとして軍指揮担当のイスマーイールに実権を奪われており、スルターンの称号も同輩の第一人者 *primus inter pares* を意味するにすぎないと論じている<sup>63)</sup>。しかし、同時代のセルジューク帝国君主と同じスルターンの称号が同輩程度のもものではありえない一方で、かれがイフリーキヤ征服を目指す実力もないことから見て、両者の議論はともに極論とすべきであろう。結論的には、11世紀末には兄弟が名望家寡頭政の中心的役割を担い、公的性格をもつモスクの碑文には、同僚名望家よりやや上位にあることを示す「最高シャイフ」と名のっていたが、私的な家族廟や墓誌銘には、君主化志向をあらわにして、支配者を意味するスルターンやそれより格下のアミールを僭称することがあったということであろう。

兄弟がズィーリー朝のタミームに対する名目上の忠誠さえ放棄していたことは、タミームが491/1098年、チュニスを攻撃したことからわかる。タミームがチュニスを征服したとされるが、チュニスがタミームの総督と駐留軍を受け入れた証拠や状況はなく、フラーサーン家を中心としたチュニスの自治が継続したことは疑いない (Id 302; A 10/279; N 130)。

### c. アフマド・イブン・フラーサーンによる「君主的」単独指導

ツビスとイドリースは、イスマーイールが兄の死後、甥アフマドに殺されるまでの1年半ほどの間、単独の指導者であったと考えている<sup>64)</sup>。しかし、ハルドゥーン (11/335) は、この間はイスマーイールとアフマドの二人が政治を指導し、叔父を殺したあと、アフマドの君主化が進んだことを伝えている。

(アブドゥルアズィーズの死後、) 子アフマドがかれの職務を引き継ぎ、叔父イスマーイールを、その優越的な地位 *makān rasmī*<sup>65)</sup> ゆえに殺した。(イスマーイールの子) アブー・バクルはバンザルトに逃れ、命を恐れてそこにとどまった。アフマドは名望家 *mashyakha* 的な行動様式 *sīra* から逸脱して、王的な行動様式をとり、その圧政は強まっていった。かれこそ、これらフラーサーン家の有名なライースの一人であり、イスラーム暦6世紀初頭にチュニスで専制を行い、町とその市壁を整備した。かれはまたアラブ遊牧民に働きかけて、道の安全を確保し、フラーサーン家の城塞 *quṣūr* も建設した。かれは学者 *'ulamā* を好み、かれらと同席した。タミームの孫アリー・イブン・ヤフヤー (509-15/1116-21)<sup>66)</sup> が510/1116年猛攻したとき、アフマドはアリーの要求を容れて、

撤退させた。次にビジャーヤの支配者、ハンマード朝のアズィーズ al-'Azīz (498-?/1105-?) が 514/1120 年に遠征したときには、かれに再び忠誠を誓った。

同じ史料に拠ったと思われるイザーリー (Id 315) によれば、

(アブドゥルアズィーズの死後、) かれの子アフマドがチュニスを統治し、22 年間、その地位にとどまった。…かれはチュニスにフラースン家の城塞 *qaṣr* を建設した。かれの時代は長期化し、かれの圧政は強まっていった。かれは名望家 *ashyākh* 的行動様式から逸脱し、専制君主 *jabābira* の振る舞い *āthār* に及ぶようになり、かれ以上に統治の資格があった叔父イスマーイルを殺した。その子アブー・バクルはパンザルトに逃れ、アフマドを恐れてそこにとどまった。アフマドはチュニスの名望家の多くをマフディーヤその他に追放し、チュニスの政治を思うがまま独占した。

ツビスやイドリースは自治都市という問題意識に欠け、一人の君主が支配する「フラースン王朝」と見なしているために、アブドゥルハックの後継者が 2 人以上あり得るという可能性を考慮していない。真実は、はじめアブドゥルアズィーズとイスマーイル、ついでイスマーイルとアフマドが寡頭政の中心になったが、アフマドが叔父を殺して、君主化を目指したものと解釈できる。その証拠として、アフマドがムスリム諸君主にならって、旧市街内部、西門アルタ門内側に、宮殿とモスクを含む城塞を建設し、自らの安全を確保しようとした事実がある。モスクが現存しているのに対し、かれのドーム廟や墓石、そして宮殿の大部分が現存しないのは、かれの君主化を嫌った市民の手でのちに破壊された可能性を示唆する。学者との交流も、君主化を正当化するときの常套手段である。

一方、アフマドは 510/1116 年、ズィーリー朝のアリーが率いる遠征軍の包囲を受けて忠誠を誓い (Kd 11/329, 335; A 10/521; N 134)、4 年後には、ハンマード朝のアズィーズの包囲にも屈服して、これにも忠誠を誓わざるを得なくなった。ついに 522/1128 年には、アズィーズの子ヤフヤーはチュニスに対して、ハザル家のムタッリフ Muṭarrif b. 'Alī b. Khazrūn<sup>67)</sup> 指揮下の遠征軍を派遣し、アフマドをビジャーヤに連行し、チュニスには自身の叔父カラーマ Karāma b. al-Manṣūr を総督 *wālī, amīr* として置いた。こうしてフラースン家の支配はいったん中断した (Id 310, 315-6; Kd 11/335-6, 363)<sup>68)</sup>。

この時期、アブドゥルアズィーズとイスマーイルはスルターンやアミールの称号を内輪で名のることがあり、君主化志向をもっていたようであるが、公的には父とあまり変わらない名望家の寡頭政を守っていたと言えよう。首班複数制や短期任期制をとり、任期終了後の在任中の執務監査を厳格化した西欧に対し、首班の世襲が当然のように承認される点が血統重視の思考方法をもつ中世イスラーム社会の特色と言えよう。長期政権は多くの同僚名望家や民衆に対し、パトロン・クライアント関係を構築することを意味し、君主政への道を開いた。西欧門閥都市でも、フィレンツェのメディチ家のように、有力な名望家が他の名望家の抵抗を抑えて単独指導権を握ろうとするとき、自らが育てた自派の中下層民の武力に頼るこ

とがある。チュニスの場合も、寡頭政に満足できないアフマドが自派の名望家と民衆の支持に頼って、実質的な「君主化」を目指したものと推測される。

## 5. 民衆の実力増大とフラーサーン家支配の復活

### a. ハンマード朝支配下での民衆の実力増大と名望家の門閥都市復活志向

チュニスは20年あまり、ハンマード朝が派遣する総督の支配下にとどまった。4人の総督はいずれもハンマード朝一族であり、カラーマの死後には兄弟アブル・フトゥーフ Abu'l-Futūh, その死後にはその子ムハンマドが任命された。ムハンマドが市民の抵抗に会って追放されたあと、総督として受け入れられたカラーマの兄弟マアッド Ma'add も、市民蜂起によって追放されている。(Id 316; Kd 11/336)。2人の総督の追放は、チュニスで民衆がはじめて主体的に行動を起こしたことを意味し、名望家勢力が抑えられていたと思われるハンマード朝支配下で、民衆勢力が増大しつつあったようすが見てとれる。

市民がマアッドを追放する状況についてのイザーリーの記事 (pp. 313-4) は、アブッ・サルトに拠ったと思われる非常に貴重なものであり、全文を紹介しよう。ハルドゥーン (11/336) の並行記事がイザーリーより詳しい個所は [ ] 内に示す。

543/1148年、シチリアの支配者(ルッジェーロ2世)がマフディーヤを征服したとき……イフリーキーヤは深刻な飢饉にあった。チュニス市民は、シチリアの支配者がスファークスを征服し、ブーナを落としてその市民を捕虜にしたのを見て、キリスト教徒を恐れた。チュニス市民はその時に備え、くり返し海の門の塔 *burj* の税関 *dīwān* にいる総督マアッドの面前に整列した。ある日、かれらが閲兵を受けるために出たとき、穀物を積んだ軽舟 *qārib* を見つけた。民衆 *amma* はこの飢饉時に、キリスト教徒の王国領に穀物が輸出されることに憤りを感じ、それを防ごうと集まってきた。民衆の騒ぎは大きくなった。[市民は総督に対し大胆になり、暴徒 *bughāt* が増大した。] マアッドの兵がかれらに立ちはだかろうとしたが、民衆はかれらや黒人歩兵 *'abīd* を武器で攻撃、惨殺し、塔の下部に火を放った。マアッドは税関から降りて民衆に降伏した。かれらは総督は保護したが、兵や黒人歩兵をかれから引き離して殺した。民衆に強要されてチュニスに残ったマアッドはビジャーヤに手紙を書き、ガレー軍船 *ghurāb* を送らせ、子たちとともに乗り込んでビジャーヤに帰った。チュニスの施政は短期間、サンハージャ族の軍指揮官 *qā'id* [アズィーズ 'Azīz b. Dāfāl] の手に帰したものの、[市民の反抗に手を焼いた] かれも去ると、市は民衆の支配するところとなった。かれらの間に、有名な内紛 *fitna* が勃発し、スワイカ門地区(旧市街北端の門外に発達した新市街)の住民とジャズイーラ門 *Bāb al-Jazīra* 地区(旧市街南端の門外に発達した新市街)の住民との間に戦闘が起きた。当時の市民の指導者は、礼拝指導者 *imām*, 故アブル・ハサンの子、

カーディーのアブドゥルムンイム 'Abd al-Mun'im であった。チュニス市民は、シチリア王や、伝え聞いたビジャーヤ王の怒りと遠征準備に対する恐れが強まったとき、カーディーの薦めに従い、[近隣のムアッラカ al-Mu'allaqa (フランス語 La Malga) 砦(カルタゴ)の支配者、リヤーフ族系アリー族の] ムフリズ・イブン・ズィヤード Muḥriz b. Ziyād<sup>69)</sup> を王に推戴しようとした。[ムフリズはチュニス市民と戦いを繰り返し、最近も市民に対し、キリスト教徒の手に陥落する前のマフディーヤの支配者ハサン al-Ḥasan b. 'Alī (515-43/1121-48) から援軍を得ていた<sup>70)</sup>。] カーディーと長老 *ashyākh* たちがムフリズを迎えに出たとき、民衆の一人が「アラブ遊牧民だろうが、トルクメン遊牧民 Ghuzz だろうが、従わない」と叫び声をあげた。そのため内紛が勃発し、ムフリズはムアッラカに戻った。カーディーは市内に戻ろうとしたが、民衆に妨害されたため、ムフリズとともにムアッラカに行き、長くそこに滞在を余儀なくされたあとに死んだ。一説には、カーディーは夏場に(ローマ水道の)高いアーチの上で横になっていたときに落ちたとも、投げ落とされたともいわれる。民衆はパンザルトに使いを送ってフラーサーン家のイスマーイルの子アブー・バクルを呼び寄せた。かれは夜の間にチュニスに着いて、籠で城壁の上にあげられ、ひそかに入市し、チュニスの統治を行うようになったが、7カ月しか続かず、甥アブドゥッラーに殺された。

以上のように、このころから民衆(アーンマ)が能動的に政治の表舞台にしばしば登場するようになる。名望家を含めた市民総体はハンマード朝総督の追放、チュニスの自治回復を求める点では一致していたものの、アブー・バクルとムフリズに対する反応を見れば、フラーサーン家支持派と反対派とに分裂していたことがわかる。おそらく名望家の多数はアフマドの支配形態ではなく、真の寡頭政の再建を目指しており、多くのイスラーム都市に見られるように、カーディーの指導を受け入れていた。一方、一部の名望家と民衆の多数はフラーサーン家の指導を支持していたようである。前者は、騎兵の不足を埋めるため、ムフリズとその騎兵を傭兵として利用しようとした。この場合、11世紀初頭、イベリア半島のキリスト教国との辺境にあたるトレードやバダホスの市民が防衛のために招き入れたベルベル系集団の指導者、ズンヌーン Dhu'n-Nūn 家とアフタス Aftas 家がそれぞれまもない時期に君主(僭主)化したように、ムフリズが僭主化する可能性が小さくなかった。一方、ハンマード朝の軍人に勝利した民衆の多数はムフリズを、たとえ傭兵としても歓迎せず、かれを招き入れようとしたカーディーを追放した。

スワイカ門地区とジャズィーラ門地区の住民の闘争については、シチリア貴族出身のアマリはスワイカ門地区を民衆地区、ジャズィーラ門地区を貴族地区とし、階級闘争と考えた<sup>71)</sup>。しかし、ともに城壁外の、モスクの設置も遅れた半田園地区であり、住民はアラブ遊牧民からの避難民が中心であった。避難民の大半は民衆であろうが、北郊外のスワイカ門地区がムフリズに苦しめられた北方の近隣農民が多く、カイラワーンなど南方からの難民を集めた南

郊外には、城壁内に適切な邸宅を見出せなかった富裕層や知識層も含まれていた可能性があり、アマリ説に根拠がないわけではないが、基本的には民衆間闘争と見るべきであろう。その中で、スワイカ門地区の民衆が徹底的な反ムフリズ、ジャズイーラ門地区の民衆・富裕層の多数が比較的親ムフリズであったとすれば、わかりやすい。

#### b. ムフリズやカフルーン指揮下の新興武装集団によるチュニス攻撃

ムフリズはカルタゴ遺跡の一部、2世紀末にローマ人によって小高い丘に建設されたヴォールト天井の長い24の大水槽とザグワーン Zaghwān (Ziqua) 山から引かれた水道橋 *hanāyā* を土の壁で囲んだ砦を建設していた (Idrisi 286; Bakri 43)。市民はアラブによって略奪されるだけでなく、イドリースイー (pp.284-5) が1140年代に書いた次の記述<sup>72)</sup>にあるように、普段は食糧供給を受けていた。したがって、ムフリズを市内に迎え入れることは、反対者が多かったとしても、十分考えられる選択肢ではあった。

チュニスは全方向を平野 *fuhūs* や主要作物である小麦・大麦の農場に囲まれた美しい都市であり、市民はアラブの指導者たち *thiqa, umarā* とうまくやっている。チュニスは、この本を書いている時点では、人口が多く、物資にめぐまれており、近くから、また遠くからの難民を受け入れている。市は堅固な土の城壁で囲まれ、<sup>3</sup>つの門をもっている。果樹園と野菜畑は城壁内に集中しており、城壁外に市民が依存する果樹・野菜はない。隣人のアラブ遊牧民が、市民が必要とするだけの穀物とハチミツ、バターをもたらし、それから他都市ではできない種類のパンがつくられている。

一方、ハルドゥーン (11/348) は、ムフリズとよく似た性格をもつカフルーン・イブン・ガンヌーシュ Qahrūn b. Ghannūsh という人物による一時的なチュニス支配を伝えている。

カフルーンは民衆 *‘amma* によって (為政者として) 擁立されたあと、振る舞い *sira* がよくなかったので、チュニス市民によってその地位から追われた。かれはマンズイル・ダフムーン Manzil Daḥmūn に定着し、そのローマの水道橋を利用して砦 *ḥiṣn* を築き、部族から離れた半端者 *awbāsh al-qabā'il* からなる軍を集め、チュニスへの略奪を繰り返し、地域を荒廃させた。市民に助けを求められたムフリズはそれに応じた。トゥブルバの支配者イブン・アッラール Ibn ‘Allāl はこの話を聞き、カフルーンに娘を与えて、かれの都市領域にある砦 *ḥuṣūn* の一つに移らせた。これがガンヌーシュ砦 *qa’la* である。二人は協力して略奪をつづけ、二人の死後も、二人の子たちは、アブドゥルムーミンが554/1159年にイフリーキーヤに来て平定するまで、略奪をつづけた。

フラーサーン家のアブー・バクルが軽舟 *qārib* から投げ出されて水死したチュニス湖内の地点付近に、おそらくこの砦と同一であろうイブン・ガンヌーシュ砦 *qa’la* があったという (Id 316)。イドリースはカフルーンの活躍時期をフラーサーン家支配開始より早い11世紀なかばに置いているが<sup>73)</sup>、カフルーンがムフリズと同時代人であること、かれの子がアル・

ムワッヒド帝国によって打倒されたことから見て、12世紀前半、ハンマード朝総督追放後間もない時期と見るべきであろう。非アラビア語名をもつカフルーン自身はおそらくチュニスのズィーリー朝かハンマード朝のサンハージャ族軍人であろう。かれは氏族から離脱したアラブ系、ベルベル系氏族民、それに混乱の中で生活基盤を失った農民をも集めて略奪集団を組織し、チュニス付近に砦を築いてムフリズに対抗したようである。

### c. 復活したフラーサーン家による民衆依存の「僭主的」支配と名望家との葛藤

一方、バンザルトから招致されたアブー・パクルの7か月後の水死は、フラーサーン家と名望家との闘争の一局面のように見えるが、イザーリーによれば、強硬派の甥アブドゥッラーによる暗殺という (Id 314, 316)。いずれにせよ、アブドゥッラーは名望家に対しより強い態度で臨むはずであり、実際、かれが死ぬまでの10年あまりの間に、カーディーのイブン・ハルワーン Abu'l-Faḍl Ja'far b. Ḥalwān とその子、姉妹の子イブヌル・バンナード Ibn al-Bannād の3人を、アラブを市内に招き入れようとしたとして、処刑している (Id 316)。以上から、復活後のフラーサーン家支配が名望家多数の積極的支持を得ていたとは思えず、むしろ自派の民衆の支持や好意 (民衆は一枚岩ではない) に依存していたと考えてよいのではないか。この時期のチュニスは典型的な門閥都市というより、民衆の支持に依存した特定門閥の僭主政にやや近い側面があったといえよう。

一方、ムフリズはチュニスに対して攻撃の手を緩めなかった。これに対しアブドゥッラーは、おそらく保護を得るため、シチリア王ルッジェーロ2世の宗主権を認め、その総督 'āmil として任命されたという (AM 162)。イドリースはこれを信じないが<sup>74)</sup>、アブドゥッラーがまもなくキリスト教国のピサ大司教と友好的な通商協定を交わしたことを見ても、その可能性は十分にあると言えよう。

552/1157年、モロッコ、アルジェリアとアンダルスを統合していたアル・ムワッヒド帝国のカリフ、アブドゥルムーミン 'Abd al-Mu'min の王子が指揮する包囲軍が、市内から出撃したチュニスの騎兵隊によって撃退された (Kd 11/337; Id 316; AM 162; T 345)<sup>75)</sup>。ハルドゥーンによれば、この騎兵隊の主力は、共通の敵の前にフラーサーン家と和解したムフリズの部下 *qawm* という。イドリースは騎兵隊の中に市民の騎士はいないと考えているが<sup>76)</sup>、市民化した元ズィーリー朝・ハンマード朝のサンハージャ族の騎士がいたはずであるし、アラブ征服時とアッバース朝初期に定着した数多くのアラブ戦士やフラーサーン軍団の子孫の中に騎士が一人もいなかったとも断じられない。

ムフリズを同盟者として市内に招いたことはまた、フラーサーン家の指導性の低下を必然的に招き、名望家による寡頭政を強めたと考えられる。554/1159年に今度はアブドゥルムーミン自らが率いる大軍がチュニスを攻撃したとき、すでにアブドゥッラーが死んでおり、その後継者とされるアリー (アフマドの子) が実際にどの程度の指導性をもっていたのかは疑

問である。包囲開始後、名望家が使節をアブドゥルムーミンに送って降伏したが、アリーは名望家が同意した自身にきびしい条件をそのまま甘受せざるを得なかった。

このチュニス降伏については、ティジャーニーの比較的詳細な記述（史料は不明）と同時代のシャッタードに拠ったと思われるアシールの記述とが利用できる（T 345-6; A 11/242）。ベージャから進んだアブドゥルムーミン指揮下の軍と70隻のガレー軍船 *shīnī*、輸送船 *tarīda*、平底船 *shalandī* からなるかれの海軍<sup>77)</sup> がチュニスに到達したのは、ジュマードー初月10日（5月30日、アシールによれば、ジュマードー後月24日、7月13日）のことという<sup>78)</sup>。チュニス湖に入った海軍が暴風で湖内から撤退を余儀なくされたものの、食糧供給を遮断した。包囲開始から3日後（アシールによれば翌日）、市民の名望家 *ashyākh, a'yān*、12人（アシールによれば17人）が市民とその家族の安全保障 *amān* を求めてアブドゥルムーミンに謁見を乞うた<sup>79)</sup>。アブドゥルムーミンが市民に身の安全のかわりに与えた条件は、市民が着ている着物を除いて、かれらのすべての農園や住居 *ribā, amlāk* と動産 *amwāl* の半分を接收してムワッヒド帝国の国庫 *makhzan* に移すことであった（アシールによれば、使節だけは全財産を確保）。ただし、近郊の村や小都市の住民は農地や住居を維持し、動産の半分だけを接收された。さらにフラーサーン家のアリーは家族とともにビジャーヤに移るよう命令されたが、移動途上で死んだ。市の引き渡しを受けたアブドゥルムーミンは、軍による略奪を防ぐ憲兵隊をまず市内に入れ、3日後には、租税査察官 *umanā* らを残して、マフディーヤをシチリア王から奪回すべく出発した。市民の財産の探索がつづき、家に押し入れられ、財の半分が没収され、接收された土地家屋と動産は売られた。自宅を一軒しかもたない市民の大半は、接收された自宅半分の分の賃貸料を払わなければならなくなった（事実上の家屋税）。賃貸料を払う余裕がないものは自宅を売却し、売却額の半分を受けとったものと思われる。まもなくチュニス西郊外の小高い丘にカスバ *qaṣba*（城塞）が建設され、アル・ムワッヒド帝国の総督宮殿や兵舎が設けられた。

以上のように、名望家を抑えたハンマード朝支配期に軍事的に実力をつけた民衆の勢力が台頭し、かれらの一部の支持で復活したフラーサーン家の支配は、ムフリズと手を結ぼうとした多くの名望家との緊張関係をはじめから抱えていた。フラーサーン家は反ムフリズ的な民衆や一部の名望家の好意や、恩顧を与えたクライアント（民衆と名望家）の支持を大きなよりどころとせざるを得ない一方で、比較的親ムフリズ的な名望家との共存を模索していたと思われる。そういう意味でこれは僭主政と名望家の寡頭政の間にある統治形態といえようが、名望家との信頼関係が十分ではなく、ムワッヒド帝国の圧倒的な軍勢の前に民衆の支持も薄れ、フラーサーン家はあっけなく名望家にイニシアティヴを奪われた。

## まとめと展望

### a. 本論のまとめ

イスラーム都市で君主から自立した市民の自治都市が短期的にせよはじめて実現したのは、アッバース朝体制崩壊後、エジプトに拠点を置いたファーティマ朝の侵攻に対し、市民が果敢な抵抗を見せた 10 世紀後半のダマスカスである（中下層民出身者主導の平民都市と名望家主導の門閥都市）。しかし、11 世紀には、シリア北部、アンダルス、イフリーキーヤで多くの都市が事実上の自治を行うようになった。

イフリーキーヤでは、ズィーリー朝の集権体制崩壊後の混乱の 1050 年代、諸都市が自立し、その中でトリポリ、スーサ、チュニス、バンザルト、ベージャ、おそらくはカイラワーンなどが門閥都市に発展した。しかし、民衆の一部が君主（僭主）化を目指す門閥都市指導者を支持した場合はあるが、どこにも平民都市が成立した形跡はない。

チュニスの場合、相対的に強力になったハンマード朝の保護下で、名望家が仲間の一人、フラースーン家のアブドゥルハックを寡頭政首班（名目的にはハンマード朝総督、のちにはズィーリー朝の宗主権を認める）として選んで自治を行うようになった。他都市と同様、一人代表制で、任期はなく、しかも首班職が当然のように世襲された点が民主政や共和制という思考に欠けた伝統的イスラーム社会の特色といえよう。そして他都市と同様、世襲制は君主化への道を開き、アブドゥルハックの子、アブドゥルアズィーズとイスマーイルは私的にはときに「王」を僭称するようになり、さらにアブドゥルアズィーズの子アフマドは、おそらく一部の同僚名望家や民衆の支持や好意に頼って、王のようにふるまい、城塞と宮殿を築いた。かれはあっけなくハンマード朝遠征軍に滅ぼされ、チュニスはハンマード朝から派遣された総督の支配下に入った。

ハンマード朝は大きな駐留軍を置くだけの實力はなく、民衆の軍事化を進めた。この中で、民衆が台頭し、ハンマード朝の総督・軍人らを排除し、ついで、ムフリズを招き入れようとしたカーディーを中心とした名望家を退けて、フラースーン家のアブー・バクルを亡命先から招き入れた。このときが、チュニスで平民都市化にもっとも接近したときであるが、傑出した民衆出身の指導者が出ず、おもに民衆に支持されたフラースーン家のアブドゥッラーが名望家との緊張関係をもった、やや僭主政に近い形の名望家との共同統治を行った。最後は、チュニスはアル・ムワヒッド帝国に吸収され、完全に自治を奪われ、市民財産のおよそ半分が接収される結果に終わった。

結論的には、チュニスは名望家の集団指導（アブドゥルハック）から、しだいにフラースーン家指導者の君主化（アフマド）、ついで民衆勢力の台頭とともに、民衆の支持に依拠した僭主化（アブドゥッラー）の傾向を深めていったものの、門閥都市としての基本構造は

維持されたと見るべきであろう。

#### b. イスラーム自治都市と古代都市、中世西欧都市との若干の比較

10-12世紀のシリア、アンダルス、イフリーキヤ等の市民自治的なイスラーム都市は、古代地中海都市や中世西欧都市とは異なる面を多くもっていた。

第一に政体の面では、古代都市はもともとそれぞれが独立国であり、それゆえに多くの言語で都市ということばが国家を意味するようになった（ポリス、マディーナ）。古代独立都市の政体は、君主政、貴族寡頭政、民主政、それに民衆に支持された僭主政等があったが、ヘレニズム時代以降は、おおむね貴族寡頭政と民会に拠った民主政の混合形態が一般的になった（と言っても、実態は門閥貴族による寡頭政が優越）。このような都市自治はローマ支配初期でも維持され、その意味でペルシア帝国やローマ帝国をはじめ中東の諸帝国は非常に多くの都市を一つの権力のもとに統合した都市連合体とすることができる。

古代都市が3世紀末以後、集権化した大規模家産制国家（末期ローマ・ビザンツ帝国、ササン朝）の長期の支配下で自治を失ったあと、自治的イスラーム都市はローマやササン朝にとってかわった集権的家産制国家（アッバース朝、アンダルスの後ウマイヤ朝等）崩壊の中で、次の集権的家産制国家に飲み込まれるまでのしばしの間、自治を回復したと言えよう。したがって、イスラーム自治都市は、分権的な封建体制下で長期にわたって門閥主導の自治を享受できた中世西欧都市のように、自治都市としては完成したものには成り得なかった（もっとも、北イタリア都市やドイツ都市の大半は神聖ローマ皇帝やローマ教皇、フランドル都市はフランス王やフランドル伯爵の宗主権を認めており、自立性が高いだけの違いではある）。官職にしても、従来からあるカーディーや財務官僚を除いて、応急的に現れたライースやアフダース等、萌芽的なもので終わってしまった。しかも、都市自治の指導者が最初こそ選任されたものの、一人制で任期もなく、世襲化される傾向をもち、市議会や都市法も制度化されない場合が多く、君主化・僭主化への道を開いた。

第二に、古代では都市が各自、法を構築していたが、集権的なローマ時代には、政府から独立した民間の法学者による法解釈（法発見）を通じて、普遍的な万民法としてのローマ法が全土で一般化した。イスラーム時代にも、はじめローマ法、ササン朝法、各地の慣習法が行われていたが、比較的早期に、「合理的思考への努力 *ijtihad*」に基づく法学者個人の意見 *ra'y*、法学者の多数意見 *ijma'*、確実な論理構成に基づく推論 *qiyas* を通じて、民間の学者が不断に解釈・再解釈する普遍的・合理的なイスラーム法（シャリーア）が施行されるようになった。民間の権威ある法学者の解釈を尊重するため、法典化を避けたことは、ローマ法とイスラーム法に共通する。イスラーム都市ではカーディー等、普遍的な法の権威者が市民の指導者になる場合が多かったのに対し、中世西欧都市では、王や領主の法、ローマ法を否定するものではないが、都市法がイスラーム都市以上に発達した。

第三に、広い農業地域を領域とする古代都市は、農民が市壁内人口の多数を占め（商工業・建設業・鉱業等は奴隷労働が主で、労働力の不足分は市民に課すりトゥルギア *liturgia* [公共奉仕] で補った）、支配層がほぼ大地主に限られるという意味で、農民都市・消費（非工業）都市であった。したがって、独立都市の経済政策の要も、おもに戦争、海賊によって富を獲得し、市民に分配することであった。これに対し、9世紀以後のイスラーム都市では、域外への輸出を目指した工業生産と商業が著しく発達した結果、市壁内及び郊外地区の人口の大半が職人・中小商人になり（農民の大半は小規模農業集落に居住）、支配層は地主のほか、大商人（貿易・金融）や官僚・軍人も重要になった<sup>80</sup>）。奴隷労働は経済的に重要ではなく、おもに家内労働であった。中世北イタリア都市でも、職人や中小商人が市壁内市民の大半を占めたが、支配層ははじめ僧侶、ついで大商人であり、都市領域の拡大に伴い、編入された農業地域の小封建領主（騎士）が市内に移り、都市支配層に加わった。大商人も郊外に土地を獲得し、地主になり、騎士的文化を身につけていった。一方、中世北欧都市では、都市領域が比較的狭く、地主の重要性はやや小さかった。13世紀以後、生産の拡大、商業の振興を目指した北イタリア、北欧都市とも、ギルドに組織された職人が大商人の市政独占に対し、市政への参加を求め闘争をはじめた。

第四に市民の組織化と徴兵については、古代都市では起源がよくわからない軍事・祭祀組織（ギリシアでは *phylai*, *phratriai*）か、地縁的・血縁的な氏族・部族 *demos*, *tribus* に依拠していた。イスラーム都市ではこのような氏族制度の残滓は払拭され、都市は壁で囲まれ入口の門をもった多くの小地区 *maḥalla*, *ḥāra* に分けられ、地区住民による自衛が図られたが、同職組織は確認できない。中世西欧都市も多くの地区に分かれたが、商人・職人がおもに職業別の数多くのギルドに組織されていたことが際立った特色である。

徴兵は、古代独立都市は原則的に市民皆兵であり、ローマ以前のギリシアやイタリアの諸都市では、中小農民が重装歩兵、地主（貴族）が騎兵となった。家産制大規模国家（ローマ帝国、アッバース朝等）の下では高給の常備軍（騎兵・歩兵）が一般化し、市民軍は後退した。しかし、自治的イスラーム都市ではもっぱら中下層民からなる歩兵が戦時に組織され、一部は給与が支給された常備歩兵と化した（シリアではアフダースとよばれる）。騎兵はもっぱら外部者（多くの場合、遊牧民かもとの王朝の常備騎兵）を雇用了。これに対し、中世西欧都市では、市民がおもにギルドや地区を単位に徴兵されたし、多くの騎士が定着した北イタリア都市では少なくない数の騎兵さえ出すことができた。

第五に市民からの徴税については、皇帝支配下の古代都市が税収不足分を、富裕層からのリトゥルギアや強制借款に頼る場合が多かったのに対し、商工業が著しく発達したアッバース朝体制下では、官僚または徴税請負人による法に則った徴税（農地税、市場税）のほか、商工業者への貸し店・貸家の賃貸収入、金融業者からの担保・利子つき借款、免職した高官の財産没収が重要になった。自治的イスラーム都市でも、これは同様であった。中世西欧都

市の場合も、市民からの炉税（家屋税）、ついで取引税を主体とした徴税と貸し店賃貸収入、それに借款（強制借款、ついで利子つき市債）が基本的な財源であった。

以上のように、10-12世紀のイスラーム自治都市は萌芽的なものに終わり、知識人によってカリフの委嘱を受けない非合法的な支配と受けとめられがちであった。その中でも、チュニスのフラサーン家支配はコルドバのジャフワル家、トリポリ（リビア）のマトルーフ家、トリポリ（レバノン）のアンマール家、ブハーラーのサドル家と並ぶ長期政権となった。ダマスカス、アレppo、バレンシア、トレード、カイラワーン、スーサ等の大都市もかなり長い市民自治の経験をもち、イスラーム自治都市は萌芽的に終わったとはいえ、決して無視できない研究課題といえよう。

注

- 1) 本稿に比較的近い立場の古代諸帝国の概観は、E. H. Cline & M. W. Graham, *Ancient Empires from Mesopotamia to the Rise of Islam*, Cambridge, 2011; Colin McEvedy, *The New Penguin Atlas of Ancient History*, 2nd edition, London, 2002, *The New Penguin Atlas of Medieval History*, 2nd edition, London, 1992.
- 2) 余部福三「西洋の中核としての中東」上巻, 第三書館, 2011, pp.135-65; Fukuzo Amabe, *State-Building and Autonomy in 'Abbāsid Frontiers*, 日本図書センター, 2005. このような原初的都市とは別に、アッシリア帝国以後の中規模・大規模国家が計画的に新首都を築くほか、辺境の防御拠点として、または商業貿易拠点、領内の未開発地域の農業開発拠点・生産物集散地として、都市を建設した。中東・地中海地域だけでなく、中国、インドも同様。宮崎市定「大唐帝国」河出書房, 1968 (再版, 中公文庫, 1988, pp. 20, 39, 130) ただし、アルプス以北の北欧では、ローマ統治下で建設された都市が帝国の崩壊とともに縮小、消滅し、都市を欠いた小領主が割拠するようになったあと、10世紀末ぐらいから、人口増加、農業生産の拡大に伴う商業の復活、新都市の勃興が見られた。その際、小領主の城郭や教会・修道院のまわりに、そのわずかな需要を満たすために商人・職人が集まって小規模な集落 *burgus*, *castrum* が成立する場合と、海港・川港を中心に小規模な商業集落 *portus*, *emporium* が成立する場合とがあった。やがて王や領主が税賦課を目的に、自ら都市を建設したり、それだけの実力がない場合には、都市の建設を許可したりするようになった。ロンドン、パリやバルセローナのように、王都の市民さえ、かなりの自治権を獲得することができた。これに対し北イタリアでは、都市が衰え、公共建築が放棄されつつも存続し、司教が皇帝代理として市政を牛耳ったが、10世紀末以降の著しい人口増加に伴い、市民が司教を追放して市民自治を獲得する場合が多かった。従来の西欧人研究者は北欧のこのような特殊な都市形成を標準と考えているところに問題があったと言える。西欧中世都市についてのもっとも包括的な書は、P. Boucheron & D. Menjot, *La ville médiévale*, Paris, 2011; T. Scott, *The City-State in Europe, 1000-1600*, Oxford, 2012 (とくに都市領域の拡大に詳しい)。中世北イタリア都市だけのスタンダードな概観としては D. Waley and T. Dean, *The Italian City-Republics*, 4th edition, Harlow, 2010.
- 3) M. G. Hodgson, *The Venture of Islam*, vol. 2, Chicago, 1974, pp. 91-135. ホジソンは、アァヤーン・アミール体制では、ウェーバーがいう「伝統的支配」の中でも、比較的伝統遵守度が低く、

## 11-12 世紀のチュニス 都市共和国か君主政都市か

その場その場で自由で合理的な法的判断が優先されると論じた。ただ、かれは都市と農村との違い、都市における大貿易商人の役割を過大視している。

- 4) 拙稿「10 世紀後半のダマスクスの市民自治運動と民衆」人文自然科学論集 120 (2005), pp. 27-52, 「11-12 世紀におけるアレppoの自治都市への発展」人文自然科学論集 129 (2010), pp. 107-132.
- 5) 拙稿「11 世紀初頭のコルドバの市民運動と民衆」人文自然科学論集 122 (2006), pp. 19-56, 「11 世紀後半のトレード市民の反王運動」人文自然科学論集 123 (2007), pp. 17-45, 「11 世紀における門閥都市としてのバレンシア」人文自然科学論集 125 (2008), pp. 3-40.
- 6) 他に 12 世紀の中央アジア (ウズベキスタン) 諸都市でも、イマーム、ライースまたはサドル *ṣadr* よばれる、学識をもった地主層の指導者が、果敢にカラハン朝に抗して市政で大きな影響力を奮った。とくに大サドル *ṣadr al-ṣudūr* の称号をとったブハーラーのブルハーン家 Āli Burhān はこの地位を 150 年にわたって事実上世襲し、セルジューク帝国、西遼、ホラズム王国などに対して、市民自治を守った。かれらの政権は、最後は民衆出身らしい盾商人の反乱によって打倒された。 *Encyclopaedia of Islam*, 2<sup>nd</sup> edition, 12 vols., Leiden, 1960-2004 (以下 *E.I.*<sup>2</sup> と略記), vol. 8, pp. 748-9.
- 7) マックス・ウェーバー Max Weber 「支配の諸類型」世良晃志郎訳, 創文社, 1970, 英訳 *Economy and Society: An Outline of Interpretive Sociology*, ed. G. Roth & C. Wittich, New York, 1968, vol. 1, pp. 212-301. 「非正統的支配」については、「都市の類型学」世良晃志郎訳, 創文社, 1964, 英訳 *Economy and Society*, vol. 3, pp. 1212-1372 (Wittich 訳); *The City*, tr. Don Martindale & G. Neuwirth, London, 1960. 世良訳は日本語表現が明確でない箇所が多い。二種の英訳は明解な訳である。
- 8) 実は、ウェーバーの門閥都市・平民都市の類型にうまくあたる中世都市は、北イタリアを除けば、西欧でも多くない。 *La ville médiévale*, pp. 325-6. 類型はあくまで本質を把握するために有効な分析概念であり、類型と他の類型との違いは相対的であろう。西欧都市でも、1320-1322 年のカステイーリヤの「首都」バリャドリド、1330 年代のチューリヒ、ジェノヴァ、フィレンツェなどで、中下層民出身の新興富裕層が門閥に加えてもらうことで闘争を収束した。 *La ville médiévale*, p. 339. 中下層民自身の蜂起による政権参加は、1378 年のフィレンツェ (どのギルドにも属さない下層職人チオンピ Ciompi の乱) など、西欧でも例が少なく、それもきわめて短期間にすぎない。
- 9) *Economy and Society* (Wittich 訳), vol. 3, pp. 1315-1322; *The City*, (Martindale 訳), pp. 173-80; 「都市の類型学」(世良訳), pp. 242-52.
- 10) H.-R. Idris, *La Berbérie orientale sous les Zirides: X<sup>e</sup>-XII<sup>e</sup> siècles*, 2 vols., Paris, 1959. (以下 *Berbérie* と略記, 引用ページは通し番号)
- 11) M. Brett, "The flood of the dam and the sons of the new moon," *Mélanges offerts à Mohamed Talbi à l'occasion de son 70<sup>e</sup> anniversaire*, Manouba, 1993, pp. 55-67 (*Ibn Khaldun and the Medieval Maghrib*, Aldershot, 1999 再録).
- 12) イドリースがアマリなど多くの西欧人の先行研究を踏まえ、詳細に紹介している。ピサ大使は Guglielmo の子 Abū Tamīm Maymūn (ムスリム?)。 *Berbérie*, pp. 680-4.
- 13) S.-M. Zbiss, *Corpus des inscriptions arabes de Tunisie*, vol. 1, Inscriptions de Tunis et de sa banlieue, Tunis, 1955.

- 14) Wittich訳, pp.1226-31, 1240-1, 1261; Martindale 訳, pp.80-6, 95-6, 119, 世良訳 pp.41-9, 78, 82-3, 140 (もっとも重要部分の世良訳 p.140 は誤訳と思われる).
- 15) ルイス (B. Lewis, "The Islamic guilds," *Economic History Review* 8, 1937, pp.20-37) はアッバース朝期にギルドがあったと論じたが, その後の多くの学者は否定している。S. M. Stern, "The constitution of the Islamic city," *The Islamic City*, ed. A. H. Houlani & S. M. Stern, Oxford, 1972, pp.25-30.
- 16) B. S. Turner, *Weber and Islam: A Critical Study*, London, 1974, pp.95, 98, 138-41, 和訳 ブライアン・ターナー「ウェーバーとイスラーム」香西純一ら訳, 第三書館, 1994, pp.146, 150, 209-214. ウェーバーのイスラーム論を, 断片的言説を集めて可能なかぎり復元しようとする試みは, W. Schluchter, "Hindrances to modernity: Max Weber on Islam," *Max Weber & Islam*, ed. T. Huff and W. Schluchter, New Brunswick, 1999, pp.53-138. シュルフターはウェーバーがイスラーム論を書いたが, 死後, 原稿が散逸した可能性に言及している。Ibid., pp.60-4, 113. また, ハッフは, 反イスラーム的言説が顕著なデンマーク出身のイスラーム史家クローネ (P. Crone, *Slaves on Horses*, Cambridge, 1977) や, アメリカのネオ・コンサーヴァティヴズの論客パイプス (D. Pipes, *Slave Soldiers and Islam*, Yale 大学, 1981) の奴隷軍人説に基づき, イスラーム = 軍人宗教説を擁護し, ターナーやロダンソンに反論している。Ibid., pp.5-7, 39-45. そのハッフでさえ, 合理主義の代表とされる近代西欧科学がイスラーム科学のラテン語訳に基づくことを, ウェーバーが知らなかったようであると指摘している。Ibid., p.27. アッバース朝期における奴隷軍人説の否定は F. Amabe (余部), *The Emergence of the 'Abbasid Autocracy*, Kyoto, 1995.; 余部福三「マームーンとムウタスィムの新軍団」史林, 66 卷 (1983), pp.63-108. 奴隷軍人説に立った余部への反論は M. S. Gordon, *The Breaking of a Thousand Swords*, State University of New York Press, 2001. 奴隷軍人説と余部説の評価について は H. Kennedy, *The Armies of the Caliphs*, London, 2001. E. de la Vaissière, *Samarcande et Samarra: Elites d'Asie Centrale dans l'empire abbaside*, Paris, 2007 は, 事実上余部の研究に非常に多くを負っている。
- 17) 中東研究者によるイスラーム自治都市をめぐる議論は次の論文に詳細に紹介されている。本文の記述も多くをこれに負う。M. Brett, "The city-state in mediaeval Ifriqiya: the case of Tripoli," *Cahiers de Tunisie* 34 (1986), pp.69-78 (個人論文集 *Ibn Khaldun and the Medieval Maghrib*, Aldershot, 1999 再録); Gulia A. Neglia, "Some historiographical notes on the Islamic city with particular reference to the visual representation of the built city," *The City in the Islamic World*, ed. Salma K. Jayyusi et al., 2vols, Leiden, 2008, vol. 1, pp.3-17.
- 18) G. E. von Grunebaum, "The structure of the Muslim Town," in *Islam: Essays in the Nature and Growth of a Cultural Tradition*, London, 1955; R. Brunschvig, "Urbanisme médiéval et droit musulman," *Revue des Etudes Islamiques* (1974), pp.127-55; Stern, 前掲論文; *Encyclopaedia of Islam Three* (以下 E.I.<sup>3</sup> と略記), Leiden, 2012-2, pp.31-2, "artisans (pre-1500)" (Maya Shatzmiller).
- 19) T. F. Glick, *Irrigation and Society in Medieval Valencia*, Cambridge, Mass., 1970, pp.213-5, *From Muslim Fortress to Christian Castle: Social and Cultural Change in Medieval Spain*, Manchester, 1995, pp.79, 88.
- 20) *Economy and Society*, vol. 2, pp.819-21, 890, 「法社会学」世良晃志郎訳, 創文社, 1974,

- pp. 383-4, 525; Turner, *op. cit.*, pp. 120-1, 香西訳, pp. 182-4; R. Peters, "What does it mean to be an official madhhab?: Hanafism and the Ottoman empire," in *The Islamic School of Law: Evolution, Devolution, and Progress*, ed. P. Bearman *et al.*, Cambridge, Mass., 2005, pp. 148-9.
- 21) オスマン帝国時代のムフティの影響については, C. Imber, *The Ottoman Empire*, 2<sup>nd</sup> edition, New York, 2009, pp. 219-22; M. C. Zilfi, "The Ottoman ulema," *The Cambridge History of Turkey*, vol. 3, ed. S. N. Faroqhi, Cambridge, 2006, pp. 212-6; J. Hathaway, *The Arab Lands under Ottoman Rule*, Harlow, 2008, pp. 116-21.
- 22) M. Rodinson, *Islam and Capitalism*, tr. B. Pearce, New York, 1973, pp. 28-75. 禁欲的な生活態度と資本主義の成長とは関係が薄いことは, Turner, p. 175, 香西訳, p. 273. 後期イスラームで大発展した神秘主義は禁欲を柱としている。
- 23) 「都市の類型学」のある個所でウェーバーも, イスラーム諸王朝家産制国家では, 俸給 (プレベンド *Prebend*) を支給された傭兵・官僚に依拠する中央権力が強すぎた結果, 都市自治や資本家の発達が阻害されたと認めている。Wittich 訳, vol. 3, pp. 1350-2, Martindale 訳, pp. 208-10, 世良訳, pp. 311-5. cf. *Max Weber and Islam*, p. 105.
- 24) E. Ashtor-Strauss, "L'administration urbaine en Syrie médiévale," *Rivista degli Studi Orientali* 31 (1956), pp. 73-128.
- 25) C. Cahen, "Mouvements populaires et autonomismes urbains dans l'Asie musulmane du Moyen Age," *Arabica* 5 (1958), pp. 225-50, 6 (1959), pp. 25-56, 233-65; *E.I.*<sup>2</sup>, vol. 1. p. 236, "ahdāth."
- 26) E. Ashtor, "Républiques urbaines dans le proche-Orient à l'époque des croisades?" *Cahiers de Civilisation Médiévale 10<sup>e</sup>-12<sup>e</sup> siècles* 18 (1975), pp. 117-31.
- 27) A. Havemann, *Ri'āsa und Qadā': Institutionen als Ausdruck wechselnder Kräfteverhältnisse in Syrischen Städten von 10 zum 12 Jahrhundert*, Berlin 1975, pp. 113-42; *E.I.*<sup>2</sup>, vol. 8, pp. 402-3, "ra'īs"; Gerhard Hoffmann, *Kommune oder Staatsbürokratie?: Zur politischen Rolle der Bevölkerung Syrischer Städte vom 10. bis 12. Jahrhundert*, Berlin, 1975 (マルクス主義の立場からであるが同様な論点)。
- 28) 個別都市の考古学調査に基づいた多くの論文があるが, 概括的要約は A. Walmsley, *Early Islamic Syria: An Archaeological Assessment*, London, 2007; M. Milwright, *An Introduction to Islamic Archaeology*, Edinburgh, 2010; *Residences, Castles, Settlements: Transformation Processes from Late Antiquity to Early Islam in Bilad al-Sham*, ed. K. Bartl & A. Moaz., Rahden, 2008.
- 29) 中世の北欧都市は城壁外の農牧地域を都市領域としなかったとされたが, 近年では, ケルン, アウクスブルク, ザンクトガレン等ごく少数の例外を除いて, フランドル, ドイツ, スイス等のたいていの都市が中東・地中海都市より小規模ながら都市領域をもつことが確認されている。Scott, *The City-State*, pp. 129-92, 216-8, 230.
- 30) マグリブとアンダルスのイスラーム化については *Islamisation et arabisation de l'occident musulman médiéval, VI<sup>e</sup>-XII<sup>e</sup> siècle*, ed. D. Valérian, Paris, 2011.
- 31) *E.I.*<sup>2</sup>, vol. 5, pp. 1180-2, "Maghrāwa" (T. Lewicki).
- 32) Brett, "The city-state in mediaeval Ifriqiya," p. 81; *Berbérie*, pp. 160-5.
- 33) Brett, "The city-state," pp. 82-5; *Berbérie*, pp. 350-2, 383-4, 395. プレットは, マトルーフ家が

ノルマン征服以前から市民自治の中心であったと推測している。

- 34) これはファティマ朝からの独立を目指すズィーリー朝がアッバース朝を支持する市民を教唆した結果である可能性をもつ。*Berbérie*, pp. 144-6. ハルドゥーンによれば、ムイZZの馬がつまずいたとき、思わずスンナ派の本心が出て「アブー・バクルよ、ウマルよ、御助けを」と叫んだため、聞きつけた民衆 *'amma* がイスマール派市民を襲い、公然とスンナ派支持を唱えたという。
- 35) アシールのある個所には「カイラワーンとガーベス」とあるが、ガーベスには別な総督がいることから見ても、またヌワイリーの並行記事に「カイラワーンとチュニス」とあることから見ても、イドリース (*Berbérie* p. 230, note 110) がいうように、チュニスの方が正しいと言える。別な個所 (10/51) の「ガーベス」もチュニスの誤記。
- 36) ハルドーンのバイルート版刊本 (Kd 33, 34, 36) の表記は *'Ābid*, *'Āmir*, *'Āmil* などとそれぞれ異なっており、どれが正しいかは不明である。本文では *'Āmir* を採用しておく。
- 37) ミルダース族に圧迫されたズグバ族は 466/1074 年にカイラワーンを売却して (Id 300), ハンマード朝の領土に移り、その遠征軍に参加するようになる。*E.I.*<sup>2</sup>, vol. 3, p. 386.
- 38) イドリースが指摘するように、誰がカーイドに資金を提供し、カイラワーンの宗主権者になったのかはあいまい。ハルドゥーンとヌワイリーによればハンムー、イザリーーによればナースィルとある。*Berbérie*, p. 273, note 102.
- 39) *Berbérie*, pp. 222-3, 258. ヤムルール家がハンマード朝に忠誠を誓ったとする。
- 40) イドリースの指摘通り、ハルドゥーンの刊本にあるビジャーヤは、ベージャの誤記であろう。イブン・ヤザールの読み方もイドリースによる。*Berbérie*, p. 233.
- 41) ハンムーはナースィルに忠誠を表す使節を送った (Kd 11/354)。ハンムーの鑄造貨幣の刻印もナースィルと同じスンナ派のものである。*Berbérie*, pp. 225-7.
- 42) 当時のガーベスはローマ時代以来の、丘の上の石造城壁と濠に囲まれた城塞都市であった。現在のガーベス市南郊の Sidi Boulbaba にあたり、現在のガーベス市は 11 世紀以後、丘の麓の川岸の低湿地に発達しはじめた郊外地区、ジャーラ Jāra, マンズィル Manzil 等に当たる。*E.I.*<sup>2</sup>, vol. 4, p. 339 (M. Talbi).
- 43) かれのベルベル系の祖父名は Walmiya (Kd 11/340), Wānammū (Bakri 18), Īlmū (Yalmū?) などと表記され、正確にはわからない。*Berbérie*, p. 237, 238 note170.
- 44) 諸史料は名前のアラビア文字表記がすべて異なっている。一応、イドリースの読み方 Maggan を採用しておく。*Berbérie*, p. 297, note 234.
- 45) *Berbérie*, pp. 119, 147; *E.I.*<sup>2</sup>, vol. 7, p. 474 (Ch. Pellat). この件の史料は信頼性が低いムフリズの奇跡伝 *manāqib* だけである。17 世紀後半のスファークスの Ibn Maqdīsh がこの史料を引用している。*Nuzhat an-Anzār fī 'Ajāib al-Tawārikh wa'l-Akhhār*, ed. Ali Zouari & Mohamed Mahfoudh, Beirut, 1988, vol. 1, pp. 368-9) このとき、イスマール派の投機商人 Ibn al-'Azīm の穀物倉庫も略奪されたという。*Berbérie*, p. 656.
- 46) イドリース (*Berbérie*, p. 264, note 66; *E.I.*<sup>2</sup>, vol. 5, pp. 59-60) はこの箇所 *khilāl mā yanzur<sup>a</sup> 'alayhi* を、「かれ (ナースィル) が状況を研究する必要がある間は」と訳しているが、「かれの統治がつづくかぎりは」の方が訳文として正しい。
- 47) Zbiss, p. 38. 現存する Amat al-Haqq という女性の墓標に、アブドゥルハックの叔父と思われるフラーサーン家の人物が女性の夫として、シャイフの称号をもって登場している。有力者は

11-12 世紀のチュニス 都市共和国か君主政都市か

- 一様にシャイフと呼ばれたようである。Zbiss, p.67.
- 48) *Berbérie*, p. 264; *E.I.*<sup>2</sup>, vol. 5, p. 60.
- 49) Amabe, *State-Building and Autonomy*, pp. 33-50; 余部福三「イフリーキーヤにおけるアラブ諸軍団の反乱」, 史林, 81 巻 6 号 (1998), pp. 37-71.
- 50) Zbiss, p. 59.
- 51) *Berbérie*, p. 264; *E.I.*<sup>2</sup>, vol. 5, p. 60.
- 52) Zbiss, p. 37. かれが禁欲的教師ムフリズの子である可能性もある。
- 53) ハルドゥーンだけが 4 カ月とするが, 他史料は 14 カ月としており, これが正しいと思われる (*Berbérie*, p. 265, note 71)。また, アシールとヌワイリーはアブドゥルハックを孫アフマドと, アシールはチュニスをガーベスと誤記 (*Berbérie*, p. 265, note 69)。
- 54) *Berbérie*, p. 631.
- 55) カリスマの支配については *Economy and Society*, pp. 241-51, 1111-55, 「支配の諸類型」, pp. 70-104, 「支配の社会学」世良晃志郎訳, 創文社, pp. 398-523.
- 56) *Economy and Society*, p. 1061, 「支配の社会学」 p. 269. 同時代の北イタリアの初期コムーネにおいても, 選出された代表は古代ローマの記憶から, コンソレ *console* (コンスル) とよばれたが, 突発的な案件にアドホックに対応したにすぎない。Scott, p. 21.
- 57) ムフリズ廟の信仰が厚かったという 12 世紀の証言は al-Harawī, *al-Ishārāt ilā Ma'arifāt al-Ziyārāt*, ed. 'Alī 'Umar, Cairo, 2002, p. 51.
- 58) Zbiss, p. 41. 石灰におおわれていたが, はがすと部分的に読めるという。
- 59) Zbiss, p. 42.
- 60) 文献 (Id 315; Kd 11/335) では, 500 年はじめ/1106 年 9 月に死んだとある。
- 61) Zbiss, p. 58. アブドゥルアズィーズの孫と娘の墓誌銘にも, かれは単にシャイフとよばれている。Zbiss, pp. 69-70.
- 62) Zbiss, p. 62. イスマーイールの娘の墓誌銘には, かれの称号がない。Zbiss, p. 55-6.
- 63) Zbiss, pp. 43, 59; *Berbérie*, pp. 265, 525.
- 64) Zbiss, pp. 54, 63; *Berbérie*, p. 266.
- 65) 刊本を修正したイドリース (*Berbérie*, p. 266, note 79) の読み方を採用する。
- 66) 刊本は誤って, アリーをタミームの曾孫としている。 *Berbérie*, p. 318, note 87.
- 67) イドリースに従って, 刊本の Ḥamdūn を Khazrūn と読む。 *Berbérie*, p. 339, note 207. 事実, イザリー刊本が Khazrūn と正しく書いている箇所 (1/310) もある。
- 68) アシール刊本はビジャーヤをヒジャーズ, ハンマード朝の王をマンスールと誤記。
- 69) イザリー刊本では Muḥammad b. Ziyād, アシール刊本 (11/31) では Maymūn b. Ziyād であるが, ハルドゥーンのムフリズを採用する。 *Berbérie*, p. 341, note 215.
- 70) ハサンは軍の主要部分をムフリズのチュニス攻撃に参加させていたとき, ノルマン人に攻撃されたという (T 341)。ムフリズは首都を放棄したハサンをムアッラカに迎え, 数ヶ月間にわたり歓待した (A 11/127-8; N 139; T 342; Kd 11/332; Khallikan 6/217)。
- 71) M. Amari, *Storia dei Musulmani di Sicilia*, 2<sup>nd</sup> edition, Catania, 1933-9, vol. 3, p. 436. アマリ説の紹介は *E.I.*<sup>2</sup>, vol. 10, p. 631 (P. Sebag); *Berbérie*, pp. 340-1.
- 72) この地誌は, 15 年に及ぶ情報収集のあと (Idrisi 6), 6 つの写本の末尾に 548/1154 年に完成したと記載されている。 *E.I.*<sup>2</sup>, vol. 3, p. 1032 (G. Oman) . イドリースイーとノルマン王 (ルッ

ジェーロ2世とグリエルモ Guglielmo1世)との関係については A. Metcalfe, *Muslims and Christians in Norman Sicily*, London, 2003, pp.101-2.

- 73) *Berbérie*, p. 235; *E.I.*<sup>2</sup>, vol. 5, p. 59. ハルドゥーンはしばしば年代を記載していない。
- 74) *Berbérie*, p. 377, note 390, p. 378.
- 75) この勝利は、アブドゥッラーがピサ大司教にあてた手紙の冒頭でも報告されている。  
*Berbérie*, pp. 392, 682.
- 76) *Berbérie*, p. 377, note 391.
- 77) 船の種類についての詳細は *Berbérie*, p. 538.
- 78) 日付の食い違いは利用した史料が違うからであるが、アマリは、アブドゥルムーミンがいったんチュニスを攻撃したが、途中でカイラワーン、スーサ攻撃に転じ、あとでチュニス攻撃に戻ったと解釈した。Amari, vol. 3, p. 487. 一方、イドリースは、チュニス包囲が1か月半つづいたと推測している。*Berbérie*, p. 387.
- 79) この使節団の中には、アブドゥッサイッド 'Abd al-Sayyid の3人の子、ウマル、ムアーウィヤ Mu'āwiya, アブドゥッサイッドと、マンスール・イブン・イスマーイルの2人の子といとこのアティーク 'Atīq, それにハーリジー al-Khārijī, ハムザ Ḥamza・イブン・ハムザ, アブドゥルアズィーズ・アル・カンムデー al-Qammūdī その他が含まれていた。いずれも名前だけで、どういう人物か詳細は不明。
- 80) 域外輸出、生産拡大への転機は、イラクや中東ではアッバース朝中期の9世紀半ば、中国では五代十国から宋初期の10世紀、西欧では11-13世紀ごろと思われる。